古史傳

自第十五段
至第二十一段

五

歴史
第一六號
函二
部
共二八冊

和書門
類
號 四二五一八
函 一三一
架 一一
冊 四〇

内閣文庫
和書
類
號 四二五一八
冊 四〇
函 一四〇
架 一六

内閣文庫
番號 和 42518
冊數 40 (8)
函號 140 185

国立公文書館
National Archives of Japan

平篤胤謹撰　男　鐵胤
孫　延胤　續攷

神代上五上卷

於是伊邪那岐命。拔御佩上十拳劒而。斬其御子迦具土神而。爲給三段矣。爾於其御刀上刃

垂落出血。激上而。爲天出安河
原在五百箇石村矣。復於其御
刀出鋒。垂落出血。激越其磐石
而。成坐神出名。磐裂神。次根裂
神。二神矣。此神出子。磐筒出男

神。次磐筒出女神。此者經津主
神出御祖也。復於其御刀出鐔。
垂落出血。激越其磐石而。成坐
神出名。甕速日神。一神矣。此神
出子熯速日神。此者建御雷出

男神出御祖也。是時出血。激灑而。染石礫樹草。此草木沙石。自然含火出緣也。故所斬出御刀出名。謂天出尾羽張。亦謂伊都出尾羽張神。亦謂稜威出雄走

神。

御佩之は。下御刀に注ぐを見て辨ふべし。○十拳劒は。師云。登都迦都留岐と訓ゐし。八拳鬚七拳脛などの例如。能を添て読むとろし。まと劒も。多知とも訓る例多れど。此はなほ都留岐なて有なむ。御紀に。九握劒。八握劒を云も有り。同じ法とおぐら。是も能を添て訓べし。十拳は。大方の劒は常度を見えて。何とおく。多く劒とて有ぬべき所ゐ。みな十拳劒を云ずまで。能と云ゐらば。拳は搏むなて。四指を竝ばゐる長さを云。されむ古書ゐ。掬字をも。握字をも書り。上代に。手なて搏みて。幾搏と物の長さを量れる如。然爲るなと今も遺れ。束るも。手して物を搏集むるを云なり。ちて十拳は。劒身に長さを云なり。

纂疏ふ柄之量とするた。都加と云語すれきて。誤ヒを所給へるあゆ。柄を都加と云は。握む処ある故れゆ。ヒ。劔のことは。下第七十段。都牟刈之大刀の処。ふ注せヒ。○三段は。師云。段を伎陀を訓むた。和名抄ふ。筑前国鞍手郡。新分爾比岐多を所る。此分字我。岐多と云す同じ。豊後大分郡も。本はたほなだあヒ。景行紀ふ。碩田をかきて。於保岐陀と訓注有ゆ。○御刀た。師云。景行紀ふ。御刀此云彌波迦志を所る。ふ依て訓ゑし。倭建命段すハ御佩ともの。波加志とた。佩を延ゑ体言れゆ。ちて御佩給ふ劔を云ふを我。其用言を體言ふ言ひ。ふして。即其物の名と去ること。御執給ふ弓を御執と云ふ同じ。此格古も今も。万の物名ふ多し。○垂落之皿。皿は知と訓ゑし。師云。

阿世と訓た非ある。皿を阿世と云た。斎宮の忌詞ふ。ふそあれ。常ふ然よまむは由ふし。○激上而。此三字た本ふ無を。予ゲ私ふ加へとるれヒ。其た此垂落る皿。天之安河原ある。磐群と化きて。激上れる事。論ひ無れば。ふヒ。○天之安河原た。安下ふ之字を加ふても書きず。阿米能夜須能迦波良と訓べし。天上ふ所る河原ふゆ。名義。師云。古語拾遺ふ。天八湍河原を。も有れど。彌瀬之河ふや。書紀ふ。天八十河中とふるも。同河と聞ゆ。須と世を曾と。皆通ふ音ある。と云き。ちて此河名は。下れ段ふも見えて。皆同河ふヒ。師た。神代の天上れ故事を云る。皆この河名を云て。他河名た見えざれど。是ハ一ッの河名ふ所らでとて流のいく筋も有て。大ある河を云ふるゑし。と云きれど。然ふは非ず。其た天上ふて。山とし云ふ。香山と云ふ如く。河た此河。山は彼山ふ限るべき。妙ある由ある事ある。を。ふ次ぐ云を見て知べし。万葉

ふ。天漢安之川原乃。まと天漢安渡とも詠る歌の。天漢と書る字ふ依て。其事と孔思ひそを。師云凡て万葉ふ賦る
れ漢国ふて云ふをあるを。御国ふも傍ひて。彼集を已哥ふも多く詠免る。其棚機女。まと安河ふど云名ハ。此方の
古の傳を取ふ引合せさる物ふり。○因ふ云ふ。彼七夕ハ
故事ハ。漢土の中ッ世人の。ふと言出さ已し漫談ふるを。詩ふも賦るをめ。其風ハ此方ふ移已てくさ〳〵引合せ説ふて
ふて正ふき事ふ哥ふ詠み扨〳〵七夕祭ふど云事さ牙ふ
て。其夜ハ。とふの已かゝ已ふど妄言して。尋常の人ハ。信ふ
然るこを有。を。思ふ世を。ハ成ふとめ。既く彼国人ふらも。
心あるハ。天上を汚ハ妄説ぞ。ふど云るもふるを。哥作者
流ハ。然ハ思ハぐるふや。互ふ競ひ相ひ扨〳〵。妄言の言比
ばふ妄ふるは。甚くかさハら痛しや。加茂翁の七夕哥ふ
ふばさの天津少女の事をゞふ。ふちとく誰ゝ言傳へけ
む。と詠れしハ。い
を有難くこそ。　此ハ天日ハ御国ふ。ふの。る河ぞ。釈紀ふ引る天書と云へる妄
云もの。ふ此河を天漢のふを。為てくさ〳〵
説を始免。俗ふも其事と。非心得しさる徒も多ゝれど。か

くは云ふり。○五百箇石村。古事記ふは。湯津石村と。ふの已。師云
縣居大人。説ふ。五百を約免て由と云已。今云。伊富を切む
を由とは。殊ハ近く通ふ音ふめ。自を湯津桂。湯津爪櫛ふ
古言ふ。由とも与とも云ふ類ふめ。れ。与ふまど与
ども。枝ハ多く。齒の繁ハ已ふ云ふ。村ハ群の意ふ已とふのめ。
万葉一ふ。河上ハ湯津磐村。まと祝詞
ふ。湯津磐村乃如。塞坐と云ふ語多し。○其。磐村を。ハ。御刀
ハ刃の血ハ。天之安河原ふ激上めて。ま扨成まる磐村を
云ふ。○激越の訓ハ。古事記ふ。走就とふるを。師の多婆斯
理都伎と訓て。万葉十ふ。我袖ふ雹手走ふ。まと二十ふ。霜
上ふのらを多婆之理。孔どふの已。俗ハ。とばふりと云
れしふ依れめ。○磐裂神根裂神。神代巻ふ。磐裂此云以簸

娑竇とゐの尸名義は師云式の祝詞ふ磐根木根履佐久彌氏万葉二ふ石根佐久見手名積來之。まと六巻はは五百二十巻はは浪の間ないもき佐具久見とも詠めり。重山伊去割見とも。おくゐのるをちやくみおとゐと云ふ同くて岩は凸凹ゐの上を通行くを云れ尸馬ぢくを云も能の面ふぢくみを云ゲあゐも同詞ありと云ゆ。此意れるばし。源氏物語ふ兒童のあざかしれをさくおを尸およびゲあるとゐるも平穏あらぬ意ふて同じ或説ふ岩根をも履裂て行ありと云ハし。ちろちて此神名は石根拆と云言を二ふ分ちて二柱ふ名けある物ふれば根も石根の意れ尸。○此神とは磐裂根裂神を申せ尸。但し此は神代紀下卷ふ磐裂根裂神之子磐筒男女所生之經津主神とゐるふ依てあり。○磐筒之男神磐筒之女神名義磐は御親神の磐ふ同じ筒は借字ふて都知ふ通ひ。塩土老翁を塩筒とも云ふて悟べし。其都は例の之ふ通ふ辭知は女男共ゐ云ふ尊稱ふゐゐと。上ふ云尸。第二段葦牙比古遲神の処。○此者經津主神之御祖也經津主神は皇美麻命は天降坐ゐ時ふ功の卓越坐して名高き神ふ坐ゐ故ゐ此ふ其御祖の成坐ゐゐ因ふまた其出自ゐ知らぬゐと云ふ傳ふ尸。さて經津主神の名義は下第百十三段傳ふ云べし。○鐔和名抄ふ唐韻曰鐔劒鼻也和名都美波と云ゐ尸今都婆と云物ふ尸。○甕速日神は師云美迦波夜備を訓ばし。今云迦下ふ之を添て唱ふるは非ぬことまと備と濁るべき由も第三十四段勝速日命の処ふ師説を注ぬを見るべし。

甕ハ借字なり。此字に就て云説ハ非なり。凡て何速日と てふ語を。みな用語よりおなじく例なり。

て其美迦を。伊迦に通ふ言にて。其伊迦を。嚴み。舒明天皇紀に。此云

伊箇之保虚。重日。皇極天皇紀に。此云伊柯之比。伊賀志御世。祝詞。まさ伊迦米志。

伊迦志。源氏葵巻よ。さゝくいゝきひさぶる心いできて。まさ手習巻に。いゝきさゝを人に見せむと思ひてゐれどあり。

などの伊迦なり。その美迦と通ふ例を。武甕槌神

字。健雷命もあり。美迦豆知。伊迦豆知。通ふ故なり。はた嚴き我美迦と云へ

る例を。仁徳天皇巻の歌に。彌箇始報破利摩波椰摩智と云

云とある。此彌箇始報を。速待と云む枕詞にて。嚴免し把

潮の速きと云意ならおなじければ。三日潮の説は下に謂ぐことなり。

る甕星も。嚴きを云ひ。悪神と云ひ。先誅ふといふるにて。嚴きこと知らる。甕栗も

嚴栗なり。此外も。神及人名に甕と云は。皆此意と知べし。

怒の伊迦も。此なるべし。（）此神とは。甕速日神を申せり。但し此も。神代紀下巻よ。

甕速日神之子。熯速日神。と云ふに依て記せり。○熯速日神。此御名は。師云。比波

夜備と訓べし。書紀に。唯一つ熯之と書る所あるハ。後の謬訓よ。耳なきさる人の加へさるなり。今云。熯字。玉篇に。

姓氏録にも。熯之速日命と二所にあまど。此も御紀に做たまさり。を見ぬれど從がふし。

火盛乾也と注せる意なり。易説卦に。燥万物者。莫熯乎火とあり。下に。樋速

日子命もあるは。即古の神なるべし。此こと。第百十三段の註にを考へ合すべし。

しはて姓氏録に。服連熯之速日命之後也。服部連。熯之速

日命十二世孫。麻羅宿禰之後也。なども。あるは。かなおなり無

き傳なり。其由を。第四十九段。服部連の下に論ふを見て知べし。○此者建御雷之男

神之御祖也建御雷之男神も皇美麻命ハ御天降の時ハ。功ハ卓越坐して名高き神ハ坐故ニ此ハ其御祖ハ成坐る因よまおそれ出自を知らゐ免さゐ傳ゐアぢて師は古事記ハ依て此神と布都主神とは一柱ニ坐ハなし。委曲ニ解置れおきぜ熟考ふゐふハ此ハ二柱ハゐて一柱の如く。一柱ニと思ヲば此處ニ成坐る御祖も詳ハ別アて。正ゐく二柱ハして其差の髣髴ゐハは幽ハ所以あゐ事と所思ゆゐ由あり其ハ下ハ云へり。第百十三段ハ武甕槌之男神の示名の出さる処見べし。○此時之血とは火神を斬給へる時ハ激上れる血を云て即火ゐり。○激灑而染石礫樹草とは其火ハ天上ハ激上れるのみゐらぢ此国土ゐる石礫草木ハも激アぢ著アと云アぢ。○草木沙石自然含火ハ聞えゐる儘ゐれど此は多くハ其一端を云る傳ハて實ハ物として火を含まぬ物ハし其は石と金ぞよ火ハ含免る事は更ハも云ハ更木と木を轔りて火ハ出し海底ハ生出る物ハ孕ハ火は含ぬアぢ有るハれも。其ハ下ハ見えさる櫛八玉神の海底ゐる海布海蓴なる咋出て火を鑽出さる ハ以て知るべし。○天之尾羽張師云或説ハ尾ハ鋒を云アぢ。劔ハ諸刃ハて鋒の方ハ張さる物ゐる故ニ云ふ。国名の尾張も熱田ハ神劔ハアぢ出て此意ハアと云アぢ。此説然も有ぢし。鋒を尾と云ことハいまざ例なる見ざれぜ然云ハじハ非ぜ鋒の張さる劔

を云ふるなり。はと尾と雄ふて。雄く去ぬを云ふも有なし。稜威之雄走とも云名の。稜威之雄諸れど云る言れ連きを。同きを思ふべし。羽と刃れ意ふなべし。今世り波婆理と云針と刃のおきとる針と云意よを。若まと。刃張の針と云意じ。まと物れ満てびたる事を。はゞるると云も意近し。○伊都之尾羽張神。稜威之雄走神。前ふは直ふ。其御刀ぬさして云。故ふ。神と云げる。此と其御霊を云ゐふ。神を云。さて伊都は。本ふ。稜威此云伊都と有なを採れ。師云此は。伊知速の伊知と同言ふて。知波夜夫流の知も是ふり。此等の詞れ意と冠辞考ちとやぶる乃條ふ委く見ゆ。ちる此言れ例は。稜威之雄諸稜威之道別。稜威之嘖讓れど云て。武きを云言ふり。稜威字と文選り見えとり。ちて漢書ふ。威稜憺乎

隣圍注ふ。神霊之威曰稜とのを有。信友云。此伊都は。武ゆ。この意ふてぞ書れゝむ。

ぬを云言れゞら。はと伊豆とも云て。齋清浄ぬる意ふも云ふ言ふ。伊豆能賣嚴彌都波女。嚴山雷。ふお伊豆某と云言いを多し。れどの伊豆去ふとち是ふて。もと同言れゆ。健きふは清く。清ぬふは健き意ふ。熟く味ひて知ぬし。と云ふゆ。此と信友ゞ正ト考ふ。委く考ふて記しかゝるを。説長れれば此処ふハ。ならましを取て記しぬ。ちて雄走とは。師説ふ。雄は上ふ云る如く。雄く去ぬを云ふ。走と劔の利をいふ。利と疾と同言ふて。走と意同じ。俗ふ口利く物言ふ口の走ると云も同じ。を云ふ。ちて上件れ神等は。此御刀れ御霊を火神の御霊とふ因て。生坐ぬしふゆ。其由下ふ云ゞし。○此段ふ。御

名れ出ある神等。御刀の御雫、神をたきて。出ばて八柱ありまど。此時成坐る神た。磐裂神。根裂神。甕速日神のみふて。磐筒之男。磐筒之女神。熛速火神た。經津主。武甕槌之男神の出自を語るとて。此處ヶ御名れ出とるふゆ。此者。經津主神之御祖也。此者武甕槌之男神之御祖也。と有る文ふ心を付て辨ふべし。ちて磐裂根裂神。甕速日神。出ばて。御刀を火ヶ因て化れる。石村ふ所生れど。分て云はゞ磐裂根裂神二柱た。石村ふをて。其た始発。御刀の刃をゆ。垂落れる血れ化とる。磐村の磐てふ語を名ふ負坐し其子をも。石筒之男。石筒之女神と申にを思ふばし。甕速日神た。御刀ふをれて。第百十三段ふ。稜威之雄走神之子。甕速日神之子。熛速日神之子。武甕槌之男神とあるを思ふべし。かくて石ふ因れ依神た。二ばしら成坐し。其子も。石筒之男。石筒之女神。二柱坐て。御刀ふ因れる神た。一柱成坐て。其子も。熛速日神一柱ふゆ。此た幽き謂有る事ふ依ゑれど。凡人れ測知る能きふとふ非ず。但し磐裂神。根裂神を二柱。磐筒之男神。磐筒之女神と二柱ふハ坐せど。一柱ふして二柱と坐し。二柱ふして一柱ふ坐ふらむを思ひ。其た神代紀ヶ。磐裂根裂神之子。磐筒男。磐筒女神之子。經津主神とあるの趣ふ聞もるを。第十二段。神五柱也。と有る下ふ云依説ふ思ひ合せて曉ばし。扨それ火を御刀を因ゆて成坐る。二御龍の神れ。正ふく二柱ふして。經津主神。武甕槌神を申に。後ふた一柱と坐まして。其を稜威之雄走神れ子と申し。ふれ即御刀の御雫ふゆ。ちて劔ハ火ふ燒れ。まと石ふ硎て其用を外ふ物外きど。火を御刀とふ因て成坐る神等。みふ武甕槌神れ德を助成して。其功は。出ばて此神ふ約

まひ。国生固め坐る二柱神の。大正統を坐す。皇美麻命の天降坐して。此国土所知看し時ふ。此国土は荒ぶる神を言向まちぬ。伊邪那岐大神は。此時の御稜威の。其時顕れあるふさとは。幽き謂ひなるさとれるゝも。○此段は傳ふ因て。悟得ることを外手あはず。其は火神を斬給へる。御刀は刃をゆ垂落れる血の。天上ふ激上ひて。まだ五百箇磐村と化ひぬと其鋒と鐔をゆ点さゞはず血も。悉ふ其磐村ふ激越ひて。神等の生坐るを想ふふ。火は如此生出し初をひ。上は昇る勢氣ひなる物ふて。今現も其の如く。燃立ち勢は昇ひなゞはは。深き謂あはは事なるぢし。天日は御国を目はあるひ見放奉るふ。火の盛ふ燃て見ゆはは。此の傳乃謂ふ依て。火の寄憑て有る故ふ。此国土をひは燃る火は見ゆるふはなし。然在ず。天はその萌騰まる初をひ。澄明き質れるゞ上ふ。火は寄憑るゞ故ふ。はは去〳〵明く。此後日神の所知看し古とゝ爲ひて。その大御光は照徹坐して。彌く益く明ひぬぞ有ける。外国人ふど。斯在謂の元因を知らば。唯は古の国土をゆ見放るまゝは。日ハ火の凝集れる物ぞと云ひ。或は火精ぞふどのみ云ぬるは。神代は古傳は傳ては。ざれバふりゝひ。但し其は外国人こそ然も有ら。御国人ぞらふ。只ゝ其説をはみ信じて。此は古傳を尋ゆもの。とも思ひさら点は。ちて国土をゆ打見ては。火ふ見ゆはは。いや悲しくこそ。を以て。神の御世よひ。比とは云はふはは。然るは沼河比賣神

の哥は青山ふ比ゞ隠らぬ。ぬバ玉の夜て出ふむと詠る比て天日をさして云るふり。猶此哥ハ第九十八段ハ云ふ然在て燃る火と言義の異れる事ゆきを漢字を見べし。參渡ひて後ふ天ゆ比ふは日字を用て燃ふ比ふて火字を當てるを以て言義の異れるゞ如く思ハるゝて此乃元の謂を深く考へざれバふめ。さて然天ゆ日ふ寄憑る火氣ハ虚空ふちひ満て至らぬ隈ふく産靈ハ神靈を佐けゆく。地ハ照入ゆ土氣鹽氣火氣相和ちて千ぢふ變ひ。万ゆふ化ひて。彼硫黄塩硝ふど云ふ始ゆくさ〳〵かゝる類の物ハ多ゆるて皆これふ因て成ふひ物類を生成して青人草ハ要を爲し其産し成せる草木を以て火ふ集むれど大ゆくも小くも凝集ひ。そき燃

盡れば灰と化て殘ひ。まさ此を分れど土と塩とふ分るゆゑ火氣は元の虚空ふ歸るゆゑれぞ火産靈神の德ハ有らはしふは有ける。實ハ火ぞうひ奇靈ふる物ハ有らじをぞ思ふ。是ハ就て按ふハ奇く妙ふる事物ハ称言ハ比てふ言を云て世ハ火ぞうめ奇異き物のふき故ハ其名を借て弘く言ひふらゆるふらむふを次く言ふを見はゆゑし。

爾其被殺坐屎。迦具土神屎御骸屎。毎段各化神矣。於其一段

成坐神出名。大雷神。次於其一段成坐神出名。大山祇神。次於其一段成坐神出名。高靇神。凡三神矣。一傳云。迦具土神出於頭成坐神出名。正鹿山津見神。次於胷成坐神出名。淤縢山津見神。次於腹成坐神出名。奥山津見神。次於陰成坐神出名。闇山津見神。次於左手成坐神出名。志藝山津見神。次於右手成坐神出名。羽山津見神。次於左足成坐神出名。原山津見神。次於右足成坐神出名。戸山津見神。次於陰成坐神出名。

抂八神也。

被殺ム。許呂佐延と訓ㄱし。佐延ム佐礼の古言ふめり。上ゟ云へり。○御骸ハ。美加婆禰と訓ム。幹骨の義ㄊるㄱし。ラは省かめり。保と婆とム通ふ音ふ已。

○大雷神。雷ハ。師説ふ。万葉三ふ。伊加土佛足石の御歌ふ。伊加豆知。おきら此名れ正しく見とるふゆ。名意ハ嚴ふ。豆れ例の之ふ通ふ助辭。知は美稱れ。と。ゆ。さて伊加豆知と云言義ハ。師説れ如くふして。其伊加豆知と名ふ負る物を。普く考ふ通ふ。凡て猛く嚴きをバ。神なも物をも弘く稱ふ古言ふゆゆ。其れ火神を火雷と云ひ。山積神を山雷と云ひ。武甕槌神を健雷と云ひ。天忍雲根命を鳴雷と云ひ。此事第百四十三段ゆ委く注べし。はと三諸岳神の大蛇の形ふ。と。しを雷と云る。此事れ。雄略天皇卷ふ見えとゆ。れどを以て。剛く猛き物ふ。ひろく稱ふ言ふるを曉べし。下ふ豫母都醜女を雷と云り。合せ考ふべし。けて伊加豆知とは。かく弘く言稱ふる歟。世ゆ雷神ぞの。と。嚴く猛きハ。れ。故ふ。專この神れ稱とれふきはふ。然る例い多ゆ。と。扨ふの御骸ゆ。ま。此神の成坐るふきれ。伊邪那岐大神れ。甚く怒坐してれ御所爲ふはふ。況て御母神も。心惡子と詔ふるばゆ。の。猛く剛き火雷神れ。殺ちえ給ふ。それ御怒も有べけきぞ。始ふ此神の生出給ひゆむこと。然有ばき理ふ。れふ此神れ德れ事れ。下ふ委く云を考合せべし。神名式ふ。和泉国大鳥郡大雷神社。大字。今本火と作るを。校合せて。改とるふ依れ。ま。と雷を。今ハ信友ゲ異本三ゲ。電と作る本も有り。同じふとゆ。越前国丹生郡雷神社。但馬国氣多郡雷神社。名神大。仁明天皇紀。承和九年十月

乙亥預官社清和天皇紀貞觀十年十二月廿七日從五位下雷神從五位上とゐのぷはと此をゆ以前文武天皇紀慶雲三年七月乙丑丹波但馬二國山災遣使奉幣帛于神祇卽雷聲忽應不撲自滅と云事も見えとぷまと文德天皇紀齊衡元年四月丙辰授河内國大雷大明神從五位下ともゐのゆ○大山祇神祇字ハ津見と訓む清音あり豆美を濁ぷて唱るハ非ふぷ名義縣居大人の師說ふ津た例の之ふ通ふ助辭見た說もあれど師說ふ津た例の之ふ通ふ助辭見た比ふ通ひてかの產靈ゐれどれ靈ゐぷぢて津見た禍津日神庭津日神ゐどれ津日を義同じと云れとるふ從ふ法し神名式ふ伊豫國越智郡大山積神社名神大○名神祭式ふ此神のゐき

た脫とるゐり其た承和四年四月預名神と續後紀ふ見ゐれバふゆ改曆雜事記曰崇峻天皇御宇庚戌歲伊與國越智郡三嶋大明神出現光仁天皇寶龜十己未自伊與此處鎭座也乃大山祇尊也とゐのぷ○當國風土記ふ宇知郡御嶋坐神御名大山積神一名和多志大神也是神者所顯難波高津宮御宇天皇御世此神自百濟國度來坐而津國御嶋坐謂御嶋也とゐのぷ此神の百濟國より度來坐りと云記たいぶりしき傳ふれぢ高津宮御世と云說た由ゐる傳ふるべし ちるハふれ神今も大三島を云島ふ鎭坐に由ふて其三島と云ふ地名ハ津國の三島をり移せる名ふ依ゐれバ高津宮御世まで津國三島ふ坐るを故ありて當國ゐ移しとることを誤り傳とるふらむと思ハるれぢゐり一名を和多志大神と申に他所ふ度し奉き依ふ由ての御名ふるべし他所へ移しとるを和多須と云る例た五十猛神の御妹大屋津比賣

命、枕津比賣命を、木、国より渡奉るとなん是あり。稱德天皇紀。天平神護二年四月甲辰。授從四位下。充神戸五烟。と見え。仁明天皇紀。承和四年八月戊戌。預名神。清和天皇紀。貞觀二年閏十月。加從三位。同八年閏三月。加正三位。同十二年八月。從二位。同十七年三月廿九日。授正二位。となり。東齋隨筆に。参議佐理。大宰秩滿歸洛。歴伊豫三島。風浪惡不能発船。夢三島神告曰。乞書額。覚乃書。庶時海上穩。榜曰。日本総鎮守大山積明神。と見え。また十訓抄に。能因入道。俗名。承永。伊豫守実綱に伴ひて。彼国に下りぬる。夏の初。日久しく照りて。民の歎浅からざりけるに。神も和哥に感給ふものなり。試に詠て。三島に奉るべき由を。国司頻りに。免れば。天河苗代水ふせき下せ。天くだ。とまに神あらば。神と詠るを。幣に書て。社司をして申上させとりぬ。きば。炎旱の天。俄ふくもりて。大なる雨降て。枯たる稻葉れしおほして。緑ろ牙りぬるとあり。此哥金葉集に收て。それ詞書に。国の一宮をなり。

津見神も。山を掌給ふを。木も山に生る物なる故に。山開ふは此神を祭るぞ古道なる。其も末は大殿祭詞に。皇御孫命乃御殿乎。今奥山乃大峽小峽爾立留木乎。考云。峽も山と山の間なり。万葉に山ろひ。古今集に山のろひ。と云る是ふて。万葉に。山乃多和。と云るも相似たり。此ろ大山小山なども。いもて。峽と云を思ふに。今も見るごと。良材も嶺ぬぎに。はあらで。山のゐもみろ多きものなれば。かく云ふ。ろ。齋部能齋斧乎以伐採弖。考云。貞觀儀式の大嘗宮條に。稻実。卜部率造酒童女云。為採内院料材向ト食山。即祭山神云。祭畢造酒童女。先執齋斧伐樹。工匠次之。役夫次之。訖歸來。とあり。とれ類に。て常の宮造りの材をば。忌部その山ろ向ひて。祭して伐始る。と。此文ふて知べし。記にも後れ物にも。宮材を採に。山神木雲を祭る。こを見えたり。本末乎波山神爾祭弖中間乎持出來弖。考云。

国立公文書館
National Archives of Japan

本株の中らゐちく立るゐゆ。古へも然ゐるを。本末を山神ゐ祭るとも云ゐらむ。他国ゐてをゐう為ゐう問べし。

とゐの巳。はゐと山口ゐ鎮坐ゐる山神ゐちを祭る詞ゐ。山口坐皇神等此者山神ゐ坐ゐこと。上ゐ引る能前爾白久。飛鳥大殿祭詞と合考へて知べし。

高市郡。石寸。十市郡。忍坂。城上郡。長谷。上ゐ同じ。畝火。高市郡。耳無。十市郡。登御名者白弖。考云。其社の在所を。御名と云ゐ。凡そ山口坐神と云は多ゐれど。殊ゐ此次の社を。月次新嘗ゐ祭らる。ちて畝火耳無ちゐら孤立し山ゐて。今ゐてち。宮材とゐ依べき木ちゐ。いと上代ゐ。古れ六の山ゐて。採初られし故有て。諸国ゐて採せらゐ。ゐも。まゐこれ山口の社を。祭りさ乃ゐ事とや成ゐらむ。

遠山近山爾生立留大木小木乎。本末打切互持参來氏云。考遠き山ち。諸国の山ゐゆ。万葉ゐ藤原の宮造れ材を。近江の田上。それ外四方れ国くをゆ。持参る事を云ゆ。是を以て此を知べし。近き山ち。この六れ山のみゐらば。ちばて近きを云ゐ。皇御孫命能瑞能御舎仕奉氏。天御蔭日御蔭登隠坐氏。天ハ雨の借字ゐて。雨を覆ひ。日を覆ゐ。ゐ。の屋ゐるを。文ゐ。ゐく云ひ。ゐ。安国登平久知食須賀故皇御孫命能宇豆乃幣帛乎。稱辭竟奉久登宣。と云るを以て知ばし。ちて此祝詞ゐ見え給へる。山口乃社くは。式ゐ大和国高市郡。飛鳥山口坐神社。大月次新嘗。○この社ち。今飛鳥村の上方。鳥形山と云ゐ在りとぞ。同郡畝火山口坐神社。大月次新嘗。○ち。れ社。むゐしは畝火山ち腹ゐ在しゐ。今ち山頂ゐ在ゆとぞ。

十市郡石村山口神社。大月次新嘗。○村。本ゐ寸ゐ作るを。正く書ち。同郡耳成山口神社。大月次新嘗。○此社ち。今俗ゐ天神山といゐ。其天神ハ。山口神ゐ。と。或書ゐ云ゐ。城上郡長谷山口坐神社。大月次新嘗。○此社ち。今ゐ長谷町中ゐ在りと。或書ゐい。ゐ。同郡忍坂山口坐神社。大月次新嘗。○此社ち。今赤尾村と云ゐ在て。天一神を称ば。

と或書ふ也ゐる即是ゐ也。此御社ども。何も清和天皇紀。貞觀元年正月廿七日。正五位下を授奉給へゆ。ゐお此外ふ。山口神社と申ゆ多く有て。添上郡夜支布山口神社。大月次新嘗。文德天皇紀。嘉祥三年十月辛亥從五位下。清和天皇紀。貞觀元年正月廿七日。正五位上。ゐの社て。今大柳生村と云て在て。天王と称と。或書ふ云。也和名抄ふ楊生。也本布とゐゆ。平群郡伊古麻山口神社。大月次新嘗。○ゐの社て。椋原村と云ふ在て。今て滝宮と称よし。或書て云へゆ。葛上郡巨勢山口神社。大月次新嘗。○此社て。今関屋村と云てあゆ。と或書ふ云ゆ。同郡鴨山口神社。大月次新嘗。○ゐの社て。帳考ふ在。倶尸羅村。高鴨山。松樹一株。下在。小祠。土人云。樹頭時見。雲灯。葛下郡當麻山口神社。大月次新嘗。○大とり下五字。本ふ脱とゐを。信友ゲ。一本て依て補ひ。大十三座とゐて合。り。と云

るふ從い於。この社て。高雄寺。山口の藥師堂の西て在て。今新宮と称とし。帳考ふ云ゆ。同郡大坂山口神社。大月次新嘗。○ゐの社て。穴蒸村と云ふ在て。今牛頭天王と称とし。帳考ふ云也。吉野郡吉野山口神社。大月次新嘗。○これ社て。龍門莊山口村て在て。今天神也いふとし。帳考ふ云ゆ。山邊郡都祁山口神社。大月次新嘗。○ゐの社て。山口村と云ふ在り。と帳考ふいへ也。ゐ也ゐるも。凡て山神也知ぢし。ぢて伊古麻山口神社とゆ下。七社。竝ふ貞觀元年正月廿七日。正五位下を授奉給へ也。ぢて祝詞ふ見え給へる六社の中ふ。四社て。並て山口坐とゐるを。夜支布山口神社より下八社は。坐と云ざるハ。何ゐふ由て。又祝詞ふ見えさる六社とゆ。位階の高く坐ことも。何ある由ふ。未考へ得ず。次段ふ。引る四時祭式。廣瀬大忌祭條ふ。是日以山口十四座合祭。と有ふハ。此御社ども。ゐ也。はと山城國愛宕郡。賀茂山口

神社ゐの卍。清和天皇紀。貞觀元年正月廿七日。從五位下を授奉り給へ卍。此も山神ゐ坐ことゝ云ふまでもゐらず。○高靇神。靇ハ御紀ゐ。此云於箇美と見え。記ゐ義淤加美と書るゐ依て訓ぢゐ字書ゐ龍也。又靈神也ともゐの卍。まさ靈字とも通ふ。名義師説ゐ。淤加の意も思得ゐど。美は龍蛇の類も稱ゐり。和名抄ゐ。水神まと蛟を。和名美豆知。とゐる美ゐき外卍。豆も例の之ゐ通ふ辞。知も等称ゐて。野椎ゐどの例も如し。はゐと蛇蝮外ぎも美も此ゐり。まと日読の已を美を訓るも此意ゐるばし。景行天皇卷ゐ天皇豐國ゐ行幸ゐ時ゐ。御膳ゐ仕奉ゐ人泉水を汲けるゐ。蛇靇の居さ卍しのば。天皇必將有鳧莫令汲と勅ゐゐゐと有り。万葉二ゐ。吾岡之

於可美爾言而令落雪之摧之彼所爾塵家武。とゐる。ゐれらを思ふゐ。此神ハ龍ゐて。雨を物ゐる神外り。ぎ云れさゐゐ如しぢて高と申ゐた靇神のゐゐゐ中ゐ。此も初ゐ生出まゐて。其を統領卍給ふ故ゐ稱ゐるばしぢて此もいぎ猛き物ゐきバ。御父子も御怒ゐ因てぞ成ゐゐむ。甚く怒りて死し人ゐどの。後ゐ雷ゐゐり。蛇ゐゐりて復ゐる こと。昔も今も多ゐハ是。故ぞ。古くハ。上毛野。君田道の靈の。大蛇と化りて。蝦夷どもを殺しさるゐどを思ふべし。神名式ゐ。備後國甲奴郡ゐ。意加美神社。惠蘇郡ゐ多加意加美神社。河内國石川郡ゐ。太祁於賀美神社。志ゐ。今在古市郡大黒村。称山王。ぎ云ゐり。さて此神名ゐ依れバ。高ゐ太祁とも訓ばきゐ。まさ式ゐ。此社ゐ並て。建水分神社もゐの卍。由ゐる事ゐり。まと茨田郡ゐ。意賀美神

社。志ふ在伊加賀村後山と云り。和泉国和泉郡ふ意賀美神社。志ふ武塔天神社在上村と云り。はさ日根郡ふ意賀美神社。越前国坂井郡意賀美神社。壹岐嶋石田郡国津意加美神社。これ壹岐島の竈神ある由ふさて此社も今武生水村ふ在りと或書ふ云り。大和国吉野郡丹生川上雨師神社。名神大月次新嘗○雨師字本ふ脱さるを今諸書ふ依て加へさり。さて雨師とは抱朴子ふ辰日雨師者龍也と云も漢風の称ふり。三代格寛平十七年符ふ名神本紀曰不聞人臣之深山吉野丹生川上上立我宮柱以敬祀者為天下降甘雨止霖雨者依神宣造件社云々と云るハ正説ふり。餘を併せ考べし。注式の或説ふ竈神と云るハ正説ふり。餘も非ふり。はて仁明天皇紀承和七年十月己酉奉授正五位下丹生川上雨師神正五位上同八年九月戊戌従四位下同十年九月戊戌従四位上。まさと文徳天皇紀嘉祥三年七月

丙戌正四位下。清和天皇紀貞觀元年正月廿七日従三位。陽成天皇紀元慶元年六月廿三日正三位。さて此社も註式ふ天武天皇白鳳四年御垂跡當社為大和之別社事見延喜格と云へり。此ふと大和神社記ふも見さり。引て考ふ止雨の奉幣使ふぜ立られ々る頃後醍醐天皇御製ふ丹生川上ふ近し祈らばはきよ五月雨の空。はさ相摸国大住郡阿夫利神社も此神ふるぢし。今謂ふる大山ふれふり。地の者も雨降山と云ふ。額ふもかく有り。或人の説ふ元八大龍王と称へるを其社を別當八大坊の門前ふ大山地主と記し有りと云へり。高処ふ移して額ふ此ふ依て按ふ。此神も山上ふ坐ふ。を謂ふる石等を祀る時ふ八大坊の門前ふ移せるふらむ。さて八大龍王とも例の僧ども此号は有れど。龍王と云を思へば。竈神ふるふと決し。雨降山とも。やがて阿夫利の正字ふり。但し八大龍王と云号を於々ふるも。いを古

如事とハ見えさゆ。其ハ鎌倉右大臣殿の哥ゐ。時ゐをゆ
安ぐれむ民のゐゞきゐり。八大龍王雨止免給へ。と詠き
ゐム。此社を云、るゝ外らむ。と思ハるれバゐり。まさハ大坊
と云も。此号をり抑けさるゐ。ふぞ有べき。猶この社ハ事ゐ
付てハ。僧徒のかき乱せゐ事いと多ゐるを。今
委しく辨へむも煩ハしゝ。此ゐ云ハ。ゐの外ゐ。

清和天皇紀。貞觀十二年八月。授伊豫国正四位下龍神。正
四位上。ともゐの卍。此社今何処ゐ在ゐ知べのらば。まと大和国宇陀郡ゐ。
室生龍穴神社あゐも。此神ゐるゐ。貞觀九年八月。大和国
従五位下。櫻生龍穴神。正五位下とゐの卍。松下見林室生山記ゐ。室生山竜穴
事。彼山ニ有三竜穴云ゝ。竜穴之底入十五丈。有五丈池。左右ニ
有穴。左穴最方也。此内ニ有石戸。廣三尺厚二寸。以為戸扉云
云。此内入七尺。大岩有之。従地一尺二寸。上ニ有最方穴。廣一
尺八寸。高一丈五寸。云ゝと云り。今室生山麓ゐゐゆ。と書
ともゐ
云ゐゆ。○上件三柱の中ゐ。山神ハ成坐るゐ就て考るゐ。

火神の御體ハ。ゐきもゐと天上ゐ上越て山とゐ卍。大山
津見神ハ。其ゐ因て生坐ると知られさゆ。其山ハ天之香
山ゐゆ。迦具土神ハ御體の化きる山ゐゐ故ゐ。香山とは
云外ゐ。岩屋戸段ゐ。彼山をゆ招祷奉卍の品を取れ
ゐ云、るを見るべし。けて山の始卍は。火神ハ御體の化きる謂ゐ因
て。諸高山の頂をゆ。火ハ燃るゐらむ。外国人ハ説ゐ。高き山の峯ゐハ。硫黄の
有るゐ故ぞゐど。事もゐげて云外れど。其やゐて。火と土
と和合ふ間ゐ。成出る物の一種ゐきゐ。此の謂ゐ依るゐ
るゐと
論ゐし。○上件文の趣ゐてハ。大山津見神ハ。雷神をゆ後
ゐ。御名の出るゐを以て。後きて。次ゐ成坐るゐと聞ゆき
ぞも。此三柱の成坐るハ。みゐ同時ゐて。其ゐ中ゐ。山神ハ。

中段ふ成坐るゐはゐ。しけるは其御體の。香山と爲れるおとは論ひれく。文此趣ふても。御名こそ次ふ出給ゑき。此神ゑ。中ふ上首と坐はしれむ。と思ハはゝ狀ふ見もるなや。斯て雷神。靈神。神ゑもふ。山ふ住む神ゐるも。此謂ふ因おとゐるばくはと。靈神の。龍ゑ類乃祖ふて。其を統領とはふ事ハ更ふも云ゑ。雷神ゑ謂もる雷獸の祖神ふて。其ゑ統領ゆ給ひ。雷獸と云ゑ漢語ゐはを。此方ふてハ。処ふ依りて。此を直ふカミナリとも。イカヅチとも云ゐゆ。又サヽ山津見神は。鹿の祖神ふ坐して。クマゑ云ふ処もゐゐ。其を統領ゐ給ふおゑ〳〵思ふ由あゐ。抑カヽはゐ事をゆ牙ふ言ふをば。人ゑ然こそ言過とるおゑ〳〵思ゐれれど。其れゐいまゞ。漢意の除おらぬもゆぞ。さるハまづ。靈神の。とハ。上ふ引る。景行天皇。卷ふ記せる故事ふて。更ふ論れきを。彼。雷獸ゑしも。予いと弱くて。秋田ふ居さゆしゐゐど。ふ。親しく見ゆるの。大さ狸ゐりゐ。毛ゑ彼。獸ゑゆ長く。や〳〵黑き物ゐゆ。往し寛政元年ゐりしゲ。五月頃ふ。いあくタ立して。神鳴りゑ〳〵き。神降ゐて。間もゐく晴さゐゐし後ふ。予ゲ從弟ゐる者の。庭ゑ築山の木とゆふ。蟻を喰ひて居さゐしゐバ。此ゑ雷獸よとて立さゐ。棒ふ槍よと手ゐとふ持て。事もゐく打殺しゐゑゆ。然るふ從弟ゲ家ゑ予ゲ家とゑ二十町許も隔き〳〵ば。知らで有しを。二日ゐの。ゐ有て。其事を知〳〵て往て見るふ。彼。獸をバ。若き人〳〵うち集ひて。早く喰竟ゐ。ゐ〳〵皮と頭ゑ殘し置ゐ。さて味ひハ。麻美狸と云物の如くふて。いと美ゐ。ゐど云ゐ。甚ゐいゐく犯ゑ。ゑ有れる。のくゐ後ふ。まさ或人。地内ふ降居さゐ。此ゑ投網てふ物を打ゐけゐ。生捕ふゐさゆしゐば。其時ゐのきよく見ゆるゐゐ。さて其を驚の竹屋ふ入きて。養おきけゐふ。常ハ狸ゑどを畜ゑ。ゐ。ゑしも猛くハあらぬ獸ゐるを。空の陰きるとき。勢気けらふ常とゑ別ふして。竹屋ゑ破ゐも安ばゐ

き状なる故に其屋の上に石など置て破らせじと構へ
おるに一日太じく夕立して かき陰れる時に遂に竹屋
を打破りて雲に飛入り去れるが 鳴とよみおるは其
のいらぬう さて此獣常に山に住て其山辺人の言をき
くに此の多のる処は神の鳴声と繁うる故に雷獣と
云ことを為れど神は鳴るこゑ少しとぞ此等を以て按
ふに彼は雷神の御末にて此に成坐る雷神に其御祖に
坐して彼獣を掌給ふ状に思ひなさはるに非ずや彼海
神の鰐は祖に坐ゑなどを思ふ所し猶下に八俣大蛇の
尸は雷とおれる処合せ考ふ法し第七十段傳を見と
ちて彼雷獣と云獣はしも雲に乗て鳴はさあく外ど信
ふ神なれども人に制せらるゝばこの巳常は卑劣物なる
は甚く奇異なに就て外に思ふに雷神の用ひ給ふに依
てぞ彼は神なる所為の所なはなて実は彼が神なるは
非ぢゆゑ巳其は鳴神は降して石を砕く木を折などは心なくて為

に事のなと凡人は思ひ居れど世の為に善
らぬ物に別て撃ひしぎまさ神功皇后の迹驚岡
を掘し処給ふ時に大石の塞りて穿得ざりしを大后は
神に祈り給ひしかば霹靂して其磐を麓裂きて水を通
なさる類の事は多るなどこれら人に責て喰ハる
ばこの巳は獣は為し得ざき事あらめや雷神の其元を掌
給ふが故に加る
功をは外ぞうし さなは凡人も神に誘はきて幽冥に
入巳やこの其神に使はなゝ時は常に変巳ゑ霊異なる
事は外も為に由なに巳 なは慥なる事実を聞持
る故にかくハ云なり 但し此は人
に限らぬ凡ての鳥獣も必然ある法し 殊に此雷獣と云ふ
近き物 物は常に も幽冥に
なや ちて神降なる事実を拠ら〳〵 按ふなは事なる其善
らぬ物を撃給ふはさなは事なる外時とは然もなら
ぬ物の撃なは事も有るハ凡人は少き智もてかふかく

ふ測知らるゝ際ふなら祢ど。是ぞ神の功れ弘く大れる所よて。然る細し紀撰びおく。御稜威を震ひ給ふはしふ。稀ふ然ほ事れ有て。物ふはき人ふまれ。謂ゆる運ぬおく。偶その御稜威ふ觸るゝぞ有れほ。其れ天日の照まれて。物れ生成れ立ゆて。物も有と同じ。然れば。何ぞ善人と云ずぎも。あまゝ。然ほおをふ逢むも。測れがあれわざおれむ。一向ふ。その御稜威の畏れを。畏はめて在よゆ外ハ形ま事ふれむ。斯て彼甚く怒れて死し人の。神魂とおれは。此の謂ふ依て。雷神と共ふ稜威速ぶる功を爲れふて。其れ彼獣を用ひ給ゝ。勢を顯れふぞ有ばき。然ら法は。彼荒ぶる事の有ゐくも非ば。熟くよ事実を察て曉るべし。ちて雷神の。世間ふ功を爲し給ふ跡を。ゆらゝ考ほふ。人の懇畏むは然るものふて。禽獣蟲の類も恐れ惑ひ。まと世ふ惡れ病を流行る妖鬼も。甚く怖ほゝげふて。其病れやれまる れど。いをも畏く奇異れおそ。其ハ彼疱瘡ふどを煩ひ居るふどふ雷鳴あれバ。直ふ石痘とり云ふおりて。事故ふくひざつおどハほゝ見ゆる事れきバ。如此れ云ぞ。 国生坐る大神の御怒れ。火神の御怒とふ因て。成坐る神の御稜威れ。いのふ太じ紀物ふらばや。此神の御稜威を。かく世ふ及施らし給ふ故ふおそ。百足の比禮蛇れ比禮をも。用ふほおと無き世とは有ふれ。おれ比礼どもの事ハ。第八十三段の傳ふ注べし。然る御

徳をば思ひ通さで。多くふ荒ぶる神ぜと嫌ひ思ふぞ。凡人の習ひなれば。道ふ志さむ人も。此理をよく思ひて。雷鳴の時ゐは。必其御祭を為べき事とぞ思ひ奉らば。○一傳云。此も古事記ふ採て記せる事。徴ふ云ゐるが如し。正鹿山津見神。名義。師も口訣ふ眞坂なり。と云ゐ。ふ従られ給まど。其義ふも非じとぞ思ふ。其由下ふ。○淤縢山津見神。師云。淤縢ハ。下處の意ゐ。今も下ゐる處を。淤理斗と云ふ。ちてかくちまふ活くラリルレは。省く例多し。○奥山津見神。奥山も聞えざる儘ゐ。○陰ハ衰婆世と訓ゐ。師も富登と訓れ給まど。火神も男神ふ坐む。此詞いゐふぞやおおも。○闇山津見神。師云。闇とは谷の事ゐ。○志藝山津見神。師云。志藝山ハ。繁山ふゐ。

○羽山津見神。師云。羽山も。端山の意と云説もろし。又葉山ふても有ゐし。青葉山ぞ云ふともいふ。○原山津見神。師云。原山も字の如けむ。○戸山津見神。師云。戸山も。奥山ふ對ひて。外山ゐ意ふゐ。と有。御紀の示。一書ハ。五段ふ斬て。五の山祇ふ為れ。とも云ゐ。此傳、委紀ふ似とれども。雷神と靈神の生坐ゐ事ゐふ紀も。却めて粗き傳、ふゆハ。按ふ。かく種くれ山津見の名ある古とも。大山祇神の御靈の。次くふ分。て。其處くを持分坐ゐを。かくる傳、ゐ出來しふぞ有べ紀。さて此傳ふ。ま始ふ生坐る。正鹿山津見神と云名の正鹿も。正字ふて。此も決く。大山祇神ゐ御靈ふ因て成れ

体。鹿神ゐるばく所思さ。高靂神ハ龍神。大雷神ハ雷獣の祖。海神ハ鰐神ゐるれどを。思ひ合にべし。其ハ信友も既く。加具土の香山ふ通ひ。正鹿の眞名鹿ふ通ひて聞ゐるは。由ゐのアげゐアと云アしハ然る言よて。彼此思ひ合に及き事ども也多ゐ体を。其ハ下ふ次く言を見て知ばし。第四十五段。眞名鹿の処。まさ第百十三段。天之迦具神ハ処を。合せ考ふべし。

故其大山積神。亦ハ云大山タノ三ナハ罪御祖命。亦名大水上神。亦云大水ノ神。亦云亦大水上御祖命。

三十ハヤマイカヅチノカミ名山雷神。此神出子。謂高水上神。亦云高此大山津見神。與野水神。椎神二柱。因山野持別而。生坐神出名。天出狭土神。次国出狭土神。次天出狭霧神。次国出狭

霧神(ギリノカミ)。次天出闇戸神(アメクラトノカミ)。次国出闇戸神(クニクラトノカミ)。次大戸惑子神(オホトマトヒコノカミ)。次大戸惑女神(オホトマトヒメノカミ)。凡八神(アハセテヤバシラマス)矣。

大山罪御祖命(オホヤマツミノミオヤノ)。御祖(オヤ)と。種々の山祇神(ヤマツミ)は御祖(オヤ)と云意ふるばかし。其(ソ)は神産巣日(カムムスビ)御祖命(ミオヤノミコト)。大土之御祖命(オホツチノミオヤノミコト)など称(ヒ)ごと如(ゴト)し。○大水上神(オホミカミ)。大水神(オホミカミ)。大水上御祖命(オホミカミノミオヤノミコト)。此(コレ)ら大山祇神の示名(シメナ)ふるさとは証(アカシ)。此御名ぞも。延暦儀式帳(エンリヤクギシキチヤウ)ふ見えて。式ふ。度會郡大水神社(オホミカミノヤシロ)と云る社を。大水神社一処。稱大山罪(オホヤマツミ)御祖命(ミオヤノミコト)形無倭姫内親王定祝(ホウ)○罪(ツミ)下ふ乃字(ノジ)ふる本も有ども。今は除きぬ。ぞ云ふる。大水神と云ひ。大水上神ぞ云ふ。大山祇神ふるさと知れと。此神を。御祖命と云ことは。此書ふ始て見えとゆ。ちて此神を。大水上ぞ稱(ヒ)ごとは。まだ四時祭式。廣瀬大忌祭條ふ。是日以御縣六座。山口十四座合祭と見え。この山口十四座と申(ヒ)ふ。前段ふ挙ふる。山口祝神社十四座を申(ヒ)ふゆ。祝詞式ふ。廣瀬大忌祭祝詞の次ふ。これ十四座の山口神社ふ白(ヒ)祝詞有ぞ。其文ふ。倭国能六御縣乃山口爾坐皇神等前爾毋。前件ふ引とる山口祭祝詞ふ。宮材を採るふ。あきて祭る詞。ふ。田地ふ依りて祭る祝詞ふゆ。皇御孫命能宇豆乃幣帛乎云々。ふ奉物の品々ふ目あ如此奉者皇神等乃數ふ省きて引きつ。

坐須山くの乃自口狹久那多利爾下賜水乎。考云。久那の約垂を延て。佐久那陀理と云、ゆ。大祓詞に。高山之末短山之末与利。佐久那太理尓落多岐都速川之瀬坐云くと云るふ同じ。甘水登受而。今の大忌祭の義解に。欲令下山谷水変成甘水浸潤苗稼得其全稔故有此祭と云るふ同意あり。天下乃公民乃取作禮留奥都御歳乎惡風荒水爾不相賜汝命乃成幸波閉賜者。初穂者云く。おゝふ奉物の品くにあるを。今も省きて引ゆ。如横山打積置氐奉牟登云く。此ふ御前に集ひて拜む人くの目あるを。今も省きて引ゆ。諸參出來氐皇神前爾宇事物頸根築拔氐朝日乃豐榮登爾稱辭竟奉久止宣と有を見れば。山神も山を知看して。其山くの口を。佐久那太理爾落下し給ふ水を。田ふ受て。穀物を取作る故ふ。山も水の水上と云意を以て。其功を稱ずて。大水上神。まと大水神とハ申おゆけ。ばと大水上御祖命とも申に事も。大山祇御祖命と申を同く。殊に稱ずとる御名ふるばし。神名式ふ。伊勢國度會郡大水神社。此社も今宇治郷畑村と云に在と。帳考ふ云。さて此社に式ふ津長大水神社なれど。一本ふ大水の二字おし。其正き本おゆ。田上大水考へ。垂仁天皇卷二十五年の処ふ注べし。此社も。今継橋郷宮崎と云処に在と帳考に云。下神社。此社も。今継橋郷宮崎と云処に在と帳考に云。下神社に引る世記に。高水神社。田上御田を進らせゆと有ふ由ある事と所思も。石見國邇摩郡。水上神社。此社のおとも。第七処ふ委く云べし。讃岐國三野郡。大水上神社。此社も。清和天皇紀。貞觀七年十月九日。授正五位下。同十七年五月二十七日。授大水上天神正五位上と見えとゆ。いま神田の別れ村。羽方村と云ふ処ふ。

一、宮二、宮三、宮おど云社ありて、其二、宮おゆと云傳ふ、其辺五村の氏神也と、帳考ふ云ひ、されふ竝び て、鄰郡大内郡ふ、水主神社ゐのひ、是も同神おるばし、此社は、仁明天皇、紀承和三年十一月壬申、奉授従五位下、清和天皇、紀貞觀八年四月九日、授従五位上、とゐのひ、今水主村と云て在て、別當を大水寺と云、長寛■年頼業勘文に、當社昇正五位、とゐのひ、と帳考ふ云、ひ、大水寺と云別當寺ゐるふても、大水、神おることを知られさり、まさ山城、国久世、郡よを、水主、神社ゐれぞ別神おり、其を第四十六段、火明、命の処よ云ふ、

○山雷、神、山、神の生坐る所以を、前、件ふ見えさる如く、伊邪那岐、大神を、御怒、坐して斬給へる、火、神の御體ふ成坐ひしらば、猛く剛く坐ひこと知ばし、故雷と云稱を負給ひ、むのし、此雷を、豆知まさ都美と訓を非おり、但し某雷とうける例を思ふふ、神武天皇

紀ふ、嚴香來雷、嚴山雷、武甕雷、神おど見えさり、此うち香來雷、山雷、二、の雷、字を、イカヅチを、も訓べれど、武甕雷の雷を、イカヅチとは訓ざうされを、此を例をして、何れも豆知と訓べきうさきど此処ハ、必山伊加豆知ふるばし、く思もれを、上の如くハ、○高水上、神、名、義、大水上の大ふ訓みお、猶よく考ふべし、

對牙て、高とを稱牙し、れらむ、延暦儀式帳ふ、坂手、神、社、稱大水上、兒、高水上、形石坐、倭姫、内親王定、祝とゐり、小社、神、社、大水上、兒、高水上、命、形石坐、宮巡と云もの、ふ、小社を遠古曾を訓て、佐く津比古、命二座と云へり、新川、神、社、大水上、神、兒、高水上、命、形石坐、宮巡ふを、新川姫、命といひ牙ひ、石井、神社、大水、神、兒、高水上、命、形石坐、宇治乃奴鬼、神社、大水上、御兒、高水上、形石坐、ふど見えあひ、此餘ふも、大水上、神、兒と云神多く、儀式に見えされど、れおゐれき事ども、ゐれむ、此ふ挙ぶ、そハ垂仁天皇、巻、傳ふ、論へるを見るべし、

ちて此神の事蹟を世記ふ。倭姫命。大御神の宮地を求免て。度會郡ふ至坐る時の事を記せる處ふ。高水神。上てふ言を省けるを。大水上を。大水と称す同らるなし。參相支。汝国名何問給。白久。岳高田深坂手国止白天田上御田進支。其處仁坂手社定給支。とあり。此を甚く時代違へるふ似されども。此宮地求の時は。某くふ鎮坐ル神等のみを現人神を現はきまして。御田進り。はと御饗れど獻られしうば。此神も現れて。御田進らち。ふり。此等の事。委く垂仁天皇巻ふ云ふなし。かくて此功ふよりて。坂手社を祝定給ひれむかし。儀式ふ。倭姫内親王定祝とあるうとく符ゆ。ちて其社は。式ふ。度會郡坂手国生神社とあるは是ふるぢし。此社は田辺村荒木田氏社の北方の小塩崎と云池の辺ふあり。坂手ハ此辺の古名ふる由いひ傳ふを。帳考ふ云へり。

外ふ大山津見神乃御子を。いを多かり。其を下ふ次次見えゆ。○因山野。山野を師説ふ。常ふを。怒夜麻と訓む例ふきを。此を夜麻怒と訓べし。下の河海の例れ如し。を。ちて因とは。山神ハ山ふ倚坐し。野神は。野ふ因坐て外ゆ。○持別而生坐とは。此神さちれ。凡の上を云へるふて。二柱神。山と野とふ別くふ生み坐るとふは非ず。その持別て坐ル二柱の。産靈れ御間ふ生坐るを。れ事ふり。まさ御合ませる由ふも非ず。勿思ひまゲそ。○天之狹土神。国之狹土神。本書ふ。訓テ土ニ云ヘ豆知ト。とあれむ。濁りて豆知を唱ふべし。名義。師説ふ。狹を志那の切まり。ある言ふて。其志那ハ級りて。坂路のふとれり。其由

た。師の冠辞考。云れてるまゝ。其を佐ゞれみ云へる例た。應神さゝあざゝるの條ゝ委し。

天皇巻の大御歌ゝ。丸邇坂字。和邇佐と有り。坂と云も。加は處れ意ゝて。（ゐゆゝ。ゐみゝゐゝ。）級處ゝ。豆た例の助辭。どの。ゐも是れり。知た尊稱ゝ。野豆知の如く。坂豆知れり。今云。御紀ゝ。天地の始れ処ゝ。

国。常立。等の次ゝ。国。狹槌。等と云る。例れ甚く錯れとる傳ゝ有り。

ゞ云ゐゝ。然れど此。二柱た。山れ坂處を掌る神ゝ坐せゞ。○天之狹霧。神。国之狹霧。神。名。義。狹た狹土の狹と異ゝして。眞ゝ通ふ佐ゝ。さて佐霧てふ言の意ハ。上。風。神れ処ゝ云へるゞ如し。

ちて坂處ゝ居て。霧を發る神れるぢし。師説と異ゝり。合せ考へてよ。○天之闇戸。神。国之闇戸。神。名。義師説ゝ。久良は谷れゝゞゞ。闇と書るた借字ゝ。大祓。詞ゝ。高山末短

山之末與理。佐久那太理爾落多支都速川能云く。ゝれ谷川の水れ落來る狀ゝて。佐た眞ゝ通ふ言。久那ハ久良ゝ通ひて。谷れゝゞ。此。神。名の闇戸と云と。式ゝ近江。国栗太。郡ゝ有る佐久奈度。神ゞ云ふとを引合せて思ふ。多理た。少くも多くも。水れ落るゞ云。此ことた。師の冠辞考。石走垂水の下ゝ委し。谷と云名母。もと此。多理の轉ゞ有るゞ。方葉十七ゝ。鶯れゝく久良多爾と詠ゞ。地名ゝ。加の久た非ず。那太理と通ひて。谷れゝゞ。髓のくらも。人。身ゝと處ゝ有る故の名れり。はゞ諸国ゝ。某倉。倉某と云地名れ多ゝ。谷ては。谷の如くれる。ゞゞゞ出ゝらむ。戸は處ゝ有り。ちて上。件。天之狹土。神ゝ次ゝ。皆天之。国之と云は。師た多ゞ。二柱。並坐。神の名を對ゝて。称ゝ。るまで

ふて。天と国とふ異なる意れと。有べらんがを云きれど。天之御柱命。国之御柱命れ。女男ふ坐にふ準へて按ふふ。此なる神とちも。女男二柱ぬく生坐しけむらし。○大戸惑子神。大戸惑女神。本書ふ訓惑云麻刀比とあれど。トを清て唱ふべし。惑れ今ハトドヒを濁りて云ども。古れ清てぞ云ゝむ。名義戸は處惑ハ字の意ふて。此神れ。谷處ふ居て。霧を發ふ神れふを。霧ふむれど。惑はしらふれを。如此名を負せる例らむ。師説と異なり。合せ考ふべし。狭土神ふ狭霧神を屬け。闇戸神ふ戸惑子。戸惑女神を屬け。引合せて此神ゐちれ。坂處と谷處とふ居て。霧を發る神とちれる事を悟るぱし。○師云。凡て古語れ意はいと易らふて。事もれき物ら。千歳の後れ世ふ其を解ふを。いと難きにぢふふむ有ゝる。其故はを詞れ。その躰も意も。世く移轉て。いゐく変ぴき如る事ふるふ。然る流の末とり。遙ふる源をうかゞふ業ふれむ。その間いく瀬れふど。ら隔とり如らむを。奈何ら容易ハ心得らるべき。彼狭土の狭を。坂ぞと云ゞ如きも。坂てふ言ふれみ耳ふまれる。流れ末の人心ふれ。甚も物遠くて。信らきぬふとふ思免ゆ。これ古学をよくして。川の八十隈を経のぼりて。源ふ至り見む時ぞ。然こそ〳〵は覚ぬ例き。然ふるものを。代くれ学者等の書紀の神名ふどを説とるれ。後れ世れ心詞を以て。直ふ當とる故ふ。こを無く。今人の耳ふれ安らふ聞も免きど。源ふ泝りて見れば。皆非ぬふとふて。中くふ物遠くふむ。○此處ふ少ふの。天神地祇の。国土ふ幸給ふ御德を諭てむを。其は上ふ言る如く。伊邪那岐。伊邪那美二柱。大御神。天皇祖命れ大詔命を受給ひて。その爲給ふ事ごとふ。国土の爲ふ免。青人草の爲とれ御所爲ふらぬれ無ぴしかれ。此ふとふ上ふを〳〵云ゆき。それ生坐る御子神と

ち。此は彼の謂ふ依て生坐し。彼た此謂ふ依て生坐ると。其生坐る謂こそ各〻異ふれども。凡て二柱神の。国土を成し堅免て。青人草を愛み給ゑむの大御心よ。生成し給ふるゑ故て。其神さちけ。今け現ふ。国土青人草ふ幸ひ給ふ。御功徳の蹟を。免て。おらくゝ察もて行れば。はゞ此御謂ふ少うも違ふこと無し。其た近く譬をと。て言はゞ。稲種を田ふ殖るを。天お日け烝生けさは。彼火神の。埴山毘賣神ふ御合坐して。稚産霊神の生坐ると。全く同理て。火神土神水神の御霊ふ因るゑ。斯て山山け口よ。佐久那太理ふ落來る水を。甘水と受て。風そ

を。はゞ〻登らける事は。山神風神け御霊ふ。ゑを。火の土て照入ることの烈〻きむ。惡虫も多く生出て。稲も枯れむとける。其烈く照入る火氣ふ烝さきて。山ふ含免ゑ水の。天け狭霧と發升。て。雨と降るは。おき山神土神。水神け幸ふ給ふ所ゑり。但し此を密ふ分て云ちゝ。霧ふ発せ給ふ神た。此段ふ成坐る神ゑ。ちふて。其を降らし分り給ふた。下ふ見えさ。ちて如此る。水分神。久比奢母智神の掌給ふ御事ゑり。火氣と水氣と。互ふ争ふはしふ。雷神のけぞ。ゝ。ぞ鳴出て。霹神の。水雨をちふふ降し給ひ。万葉ふ我ゞ崗の霹ゑ。雪の撒けしそ。ふちりゝむ。人安らよなよけびえ魂ぎゑむかふ畏免ば。況て虫ゑどは。深く穴て隠れ死も安免。ちて天霧ひ

雨の過きば。風の吹出て吹撥ひ。風の烈しけきバ。火氣の盛ふゐて。災事も起らむとするを。其火氣ふ催されて雲起て。雨も降來て風を和ら。如此神〻の御所業も。互ふ相助け相制て。国土青人草を幸ひ給ふ。其元の理をおし考ふれむ。天神祖命の。此国土修固成せと。御言依し給ふ依大詔命を。二柱神も重みし給ふ大御心ふ。生成給へる神さちふ坐ゆ故ふ。然るを外国人どもの物理を究めむとハ出れど。然ゆゆふ神国も人ふ初め。其元の謂をバ得知ずして。火も土を承ふと雨も降て。火と水と爭ふはしふ。雷も鳴依ふ。極ら人も思ひて。如此神さちの。掌分け坐ゆ御德と知らで居る物を。は。譬へむ人も闇処を。を打出出を。此方ふ居る人も。然るふとゝも知らで。磯の自ふ飛來るを思ひ居依ゆ如も。

く。いと浅ましく去。祈りて雨降り。祈て晴るゝても。神の御心ふ因ることふゐるを熟く思ひて。穴うしこ。古学も。此徒も。也外国の説ふ。惑ひそ。彼。さひ於るや。戒人も。去ら。心ゐるも。光神鳴り。風烈き時ふどは。甚く畏ら。も有る。を。○上件云る神ゐちも。其生坐依元の謂も。風神を除。妃ては。凡て火神の由縁ふ因て。生坐るふ就て。但し風神の最初ふ生坐して。ちし次ふ。火神の生坐るふと〻。現て見る処の事実とを合せて考ふるふ。此も幽き契ゐ。上て云も。上て云るゆ如し。れ不按ふて。火は万物を害ひ亡して。甚く世も災事を。れ去畏き物ふるを。はと有て。と有依万物を幸ひ生し。万事を発し初む依物ふるふを。上ふる傳どもを熟味ふ。此後伊邪那岐命の。豫母都国ふ往坐して。其穢ふ觸れ給ひ。其を御滌まして。多くも神ゐちの生坐依ふ

ぜ。云もて行くば。元火神を生坐る事を已起れる事れ
ほれ。いとも靈妙ある事れらばや。おお次くふ云ふ
を見て曉るばし。

於是伊邪那岐命。欲相見其妹
伊邪那美命而。追往豫母都國
矣。故其伊邪那美命。自殿騰戸
出向坐時。伊邪那岐命語詔坐。

愛坐吾那邇妹命。悲思汝坐故
來。吾與汝所作坐國。未作竟故。
可還詔矣。爾伊邪那美命答白。
悔哉不速來而。吾已爲豫母都
戸喫。雖然愛坐吾那勢命。入來

坐出事恐故。欲還。且與豫母都
神相論。族也。莫視我白而。還入
其殿内出間。甚久而難待矣。故
刺左出御美豆良。湯津桃櫛出
男柱一箇取闕而。燭一火入見

出時。宇士多加禮斗呂呂岐而。
八雷公副居矣。

欲相見相と師云。逢の意ふ見ばし。○豫母都国ハ。上ふ下津国とゐる国れおとよて。即夜見国を云ふ。然るを豫母都国と云た。豫母都醜女。豫母都平坂れど云例ふて。都と之よ通ふ助辞あり。名義ハ。字の如く夜見ふ卍。其と此国ハ。大地の根底ふ成卍て。此事ハ。第三段ふ委く注へり。国土ふ隔られて。天れ光を受ざる国ふる故ふ。暗う卍しゐば。如此は云ふ卍。下文よ。燭一火と云ふを思ふべし。○追往。師云。往て伊傳麻

志と訓ばし。凡て行給ふことを。古言ふ伊傳坐と云へり。故
行幸をも。古くは伊傳麻志と云へり。此語本て。出る意ふ云
るふ毋有るれど。必ち延でも多く行賜ふも來賜と
云ふも云へり。今の俗語ふも。御出あさはと云を。行こをふ
も。來ことよ毋用ふるを。同じ心ばあり。
○殿騰戸。古は。登能〻阿宜度と訓べし。伊邪那美大神の
住給ふ。御屋の戸れり。騰戸を云て。下を上に引上ふ戸
を云れるばし。今も有もれあり。師說ふ。崇神卷歌ふ。瀰和
能等能度と有り。三輪之殿戸ぁゆ。此ふ依て。登能度と訓るし。と
云きとれど。ちては騰字無用あり。但し眞福寺本ふて滕
ミドれど訓るき とあり。此ふよれば。ク
ふや。猶考ふべし。○汝字。師云。前ふて那と訓おきを。此は

美麻斯と訓むばし。元正紀宣命ふ。美麻斯乃父止坐天皇
乃。美麻斯爾賜志天下之業止云〻。美麻斯親王乃齡乃弱
爾云〻。吾子美麻斯爾云〻。此美麻斯て。聖武天皇を指て。元正天皇の詔へるあり。光
仁紀ふ。美麻之大臣。これ藤原永手公をさして。光仁天皇の詔へるれゆ。あど有る
ふ依れり。ちて言義ハ御坐り。今も尊びては。御所御前れ
ぎ云ふゆ。まと若くて御身しふて。○所作之国て。所生之
国と云むが如し。其は生を成とも云ひ。成を作るとも云
ふ。ぞあり。○未作竟故とは。師言ふ。下ふ大名牟遲與少毘
古那。二柱神相竝而。作堅此国。あるふことあり。是今妹妹
神の未作竟さまたぬ所有る故あり。相照して見ばし。と

ゐの尼。ちて妹妹二柱神の。国作給ふる事實ハ。物ゐ見えざれども。尾張風土記ゐ。国造坐大神と見え。出雲風土記ゐ。神門郡古志郷の處ゐ。伊弉那美命之時。以日淵河築造池。をあるを思ふば。只り生給ふるれみゐらぶ。作堅も爲給ふ依ゐ尼。其れ池を造るおとれ。潮ゐまれ。水ゐまも彼此の水を。一ト処ゐをせて。餘処を潤さむとて安るれ本をりゐてはと旱魃の時れ用水ゐも安る事ゐり。○可還詔矣。師云。麻世の世を延て。佐泥と云は。古言れ常の格ゐり。○悔哉不速來而。師云。哉。字書紀ゐ。伽夜神武巻。をも。柯佐顕宗巻。をも注せれども。れ本加母と云ぞ常ゐる。加那と云ことれ。奈良のころまでハ見えば。ちて此れ。既ゐ豫母都戸喫し給ふ依ゐと。戎悔給ふ依御言ゐ尼。○

豫母都戸喫。師説ゐ。閉とは卽竈のおとゐり。戸字を書ハ。竈を本ゐて。民戸をも然云故ゐり。漢国ゐて。民家を戸と云故ゐ。此方ゐても。民家を閉と云ゐ。此字を用ゐれり。さて竈を以て民家をよぶこを。今世の言ゐも。幾竈と云。まと竈ゐ絶るゐども云を。りまと民戸幾烟。ちて豫母都戸喫とは。夜見国の竈ゐと云ふも此意ゐり。

て。煮炊とる物を食を云尼。是れむ火を忌清むる事れ本れ尼れ依。纂疏ゐ問。水火。是天生之物。無分染淫。而神事忌。火何也。曰火雖是淫因物而穢故不食炊爨之物。而已。と云る。水火ハ天生の物ゐれバ。穢ゐしと云れ。妄ゐ理をのみ思ふ漢意ゐり。もし物ゐ因て穢るとせば。夜見の物れ。炊爨の具ゐ限らば。摠て穢れさるばきを。取分て竈をしも云れ。もと其火ゐ穢の有る故ゐらぶや。後ゐ男神れ御身ゐ著る御衣服ゐど。穢しとて投棄とゐふれ。夜見の凡てれ穢ゐり。然るゐ今此ゐれ。他の物をれゐまハ安して。唯戸喫をしも詔ふれ。火の穢れ重き故ゐり。さて火ゐ淨と穢とゐる所ゐることは。如何ゐる所以とも測尼知

ゐきりのらぬを、其理ゐしと思ふるハ、神の御言を信ぜ
ゐて、妄ふ己が心を信むものゐり、今世りて、神事れ時、ま
と神の坐、地ゐどふこそ、火を忌こと有免れど、ゐばて世
間ふて、然るゐげもせぬて、火れ穢を云ハ愚れるゐゆ〳〵、
さかしらゐる漢意の弘ごれるゐゐ、今云、上ふ云、る如く、
御祖神の生給へる処、去でふ二種ふて、其、やゐて清きと
穢きと、異ゐる状よ見ゆ上
て、其を撰まゐて有べゐのらゐ、ゐの外かしゐ、万れ禍て、火の
穢ゐ〳〵から起るぞかし。神道ふ志さむ人て、由ゐき漢意
を捨て、とく此を思ふ法ゐ知ゐゆぞ。か〳〵きバ民を撫で、世
治むりて、先天下の火を忌清免て、神の御心を取奉る
法きものぞりて今此ふ如此申し給ふて、族離ゐ法ゐ御
心は坐はして、はと此国土ふ還坐まゐしくは思ゐし食
ものから、此豫母都戸喫の穢よ因りて、還坐去こと不能

ゐよしれゐ、此御言をよく味ひて、ゐの外ゐのしゐ、火の穢を
犯ゐざゐふ外思ひゐしそと有ゐ。此て実ふ然る説ゐり。猶次くよ云を見を。
ちて此神て、ゐゐ夜見国を忌惡み給ふ故て、彼国ふ屬る
事物をば返遣てむ。失ひてむと、稜威速び給ふ御靈の盛
外ゐよ依て、石屋戸段ふ、万ゐの物を、此神の御體れ化れ
る。香山とゆ取れるゐゐ、其て彼度れ神事ハ、夜見国よゐ
起れる禍を返遣ゐ失はむとゐるの事ゐゐしかざれゆ。
委くて彼処ふ云ゐし。○雖然ハ、豫母都戸喫して、還坐ゐのと知御身、
上とゐゐ坐ゆ、然れども云むゆ如し。本て然、字のみゐゐしを、師れ訓よ
依りて、雖字を加へと。○恐故て、俗ふ難有勿體ゐけきバ、ゐど云意

ばゐふて。吾は豫母都戸喫して。歸ゞゐ妃身れでのらも。汝妹命の。御自身歸坐せとて。入來坐る事の恐けきば。とれ卍。○欲還師云。此袁てふ助辭た。古歌をとく知れらむ人は。自ら味ひ知ぢし。と云きゐゐゐ如し。○且字は。斯婆良久と訓ゐし。其た豫母都神と相論ふ間を。姑く待て。我を視給ふれとゐめ。下文ふ甚久而難待矣。とゐるとゝけ合ふ語ゐめ。○豫母都神た。如何ゐる神と云ゐと。御名の無れむ。知ぢゐ由ゐれきど。既く此国の成初し時ふ。国之底立神。豐斟渟神の成坐しゐきむ。此国ふ元とめ神の坐ましける。其初た詳ゐめ。ちて下ふ伊邪那美神を。豫母都大神と申ゞよし見えとれば。此神の大神と爲卍給ハざ卍しゐどた。此ゐ見えゐる豫母都神ぞ。大神ぞた坐はしゝむ。故此神と相論ハむと。は宜へゐるゐゐゐゐし。○相論。師云。阿宜ハ言舉の如し。都良布ハ引ゐらふ。挂ゐらふれどの類ふて。其貌を云辭ゐめ。今云。相字ふ其意ゐり。ちて此た。上国ふ歸坐むとゝるゐとを。相議ゐまふを云ゐゐゐゐし。○莫視吾ハ。夜見国の。實ゝ御有狀ゝ見苦さを。男神ふ見せ給はじとてゐ卍。其ハ下文ふ宇士多加礼斗呂を思ふべし。然在バゐの出迎坐ゐ時ハ。夜見の實ゝ御呂岐而。とゐる貌を製ひて。元の御貌ふて相見坐るゐ卍。其た下文ふそを御覽して。男神ゝ始て畏まゝ。を思べし。○殿内ハ。師云。登能奴知と訓ゐし。

神功皇后紀の哥よ。腹内を波邏濃知と詠み。万葉ふ。国内を久奴知と訓る例あり。○間ハ。師云。阿比陀と云むも惡ろら祢ど。おか。富枵と訓ばし。然訓る例。万葉十一ふ有り。

○甚久而。甚た。師云。伊登と万葉ふ訓。安ばて伊登てふ叶へり。最字た當らば。言ふた。甚字とく也と云れき。ちて此た。上ふ且云くと有ふと。挂合へる語ふり。○難待矣。師言ふ。待ろ祢也云語。万葉ふ多し。加禰ふた多く不得と書。凡て迦泥と云む。みふ此不得字の意ふて。待ろ祢た待得ざるを云ふ。俗ふ云とた難字も意は通ず。まさ語も。加互と云ふ通ずれいちゝ達ひあり。

ども。此の難を直ふ也ふ訓てた惡し。也有り。ちて此た前ふ。且也詔ずるふ合せては。甚久ふ知ふ待ふの矛給ハざ。し。○御美豆良。此た御紀ふ髻とふの。正字ふ。師云美豆良は。上代ふ。

男ハ御裝ふて。髮を左右ふ分て。結綰さるものふり。下ふ天照大御神の。解御髮而纏御髻さるふ。とふるも。息長足比賣命ハ。櫃日浦ふして。御髮を解して。海ふ入洗ふるひて占ふるふ。御髮自分さる歟。即その分きさるまゝふ結て。御髻と爲ふるふ事ふの。ふも。假ふ男貌と爲給ふ。ハ。ふは。崇峻天皇卷ふ。古俗年少兒。年十五六間束髮於額。十七八間分爲角子。今亦然之とふの。ふ。此角子即美豆良ふり。十七八間とふるた。や〳〵後の事ふるべし。いと上代ハ。凡て男た然せしふと。右ふ云ゞ如し。○角子をふのげまハと訓るハ。後の称ふり。即みずらと訓ゞし。万葉七ふ。角髮とふの。左右ふ有ふゞ角の如くふる故ふ。かゝふ稱た有ふり。後世ふ鬢頰と云ふた。此美豆良ふ

訛れる言あり。江次第ふ幼扨ろれ大御神の御裝の所を主之時垂鬢頬とも云ゆ。以て見まバ。美豆良ふも珠を飾ゆしあゆ。万葉二十ふ阿母とじも主ろもゞもやいゑゝきて。美豆良の中ふ石ゆ牙まろまくも。○湯津爪櫛た。湯津た。五百箇れ約れる如ゆ。第十五段ふ師説を引て注せるゞ如し。爪は。師云借字ふて。加都麻の上を畧ける如ゆ。加都麻は堅津間ふて。多都を切むれバ都ふ。櫛れ齒の如ゞくて。間の堅くせまれる歟云ゆ。无間勝間小船乃勝間も此意れりとあゆ。按ふふ爪た。都麻理て ふ言の理れ省ゆとるふて。櫛の齒れ如げくて。間の迫れ体を云ふるなし。又もしくた爪た正字ふて。齒の狀爪ふ似とれバ。如此云ゆ。櫛ハ。師云。本串と同名れゆ。火を燭し賜ふを思ゆバ。上代の櫛れ齒

はゆ〜長かゆしのば。串と同類ぞかし。○男柱た。師云紀ふ。雄柱を石ゆ。ふれをホトリバと訓るハ。辺齒れ意ふて。中古の称ふるべし。二記共ゆ柱とあれど。古言た然らじ。共ふ袁婆斯羅と訓ゆし。字鏡ふ。幢柄。橋梁之左右之柱。平止古柱と石ゆ。大神宮年中行事ふ。東男柱。西砌云云。ふれた御殿の高欄れ男柱ゆて。字鏡ふ云ると同じ。是ふ準ふまば。櫛も左右れ端れ大ふる齒を。男柱を云けむ。ちて此を取闕て。火燭ゆ石ひしを思ゆば。上代の櫛齒ハ。〜長かゆ巻むこと知ら法。○一火。ゆ〜火を。て。も有ぬ法きを。一火とも云ゆる由は。次段ふ云法し。今世人夜忌燭一火とゆる処。○宇士多加禮斗呂く岐而。御紀ふ。蛆沸膿流而を書ゆ。師云蛆た本草てふ書ふ。李時珍云。蛆蠅之子也。凡

物敗臭則生之とゐの尸。和名抄ゐは。胆を波閑乃古。とゐの尸て。宇士てふ訓はゐし。胆と蛆を通ふ。字鏡ゐは。蜡を宇自とあ尸。蜡の宇自ゐるはきは由て。いのゝ知らぬ。今も腐爛する物ゐ生る小虫を。宇士をぞ云。多加禮て。今世の語ゐ。ぞはて鳥虫れどの。物ゐ多く集はるを多加留と云。人多加理と。人ゐも云。即宇士ゞゐるとを常ゐ云尸。但し其て。良利留禮を活く辭ゐ体歟。さのらむ。さかり。ゐかる。さらき。此て禮と有きば。今世の用格とは少し異尸て。今の語れ如くゐらば。此ハ多加理と。ゐのれ。さらる。さらるゝ。ちゐるはき格ゐり。禮留。留。を活く格ゐめ。ゐのれ。さらる。さらるゝ。ちきど其て。通ふ例も多し。離れ。はゐめ。恐れ。おそ尸。乱ト呂き。みだ尸のゐぐひゐめ。ヰ呂呂岐而て。ヰ呂祁氏と云ゐ同じ。盪淫鑠ゐどれ字歟。ぞら

かれを訓も。ぞろけされといふ言れ尸。暮蘋汁を ヰ呂く と云も。とろけさる意ゐめ。○八雷公とは。即下ゐ見えゐ。八人之豫母都志許賣ゐれゐ尸。此ゐと徴了委く論へめ。其を伊加豆知とも云をしは。上ゐる大雷神の處ゐ云、ゐる如く。伊加豆知を云て。凡て猛く剛き物を云稱ゐれゞれ尸。○副居矣とは。紀ゐ。上有八色雷公とゐる如く。伊邪那美命の御上ゐ。此雷等の附副奉尸て居さめしとゐめ。ちて夜美国れ實の有狀て。かく穢く畏き狀ゐる故ゐ。其をは。さ男神れ御覽さむこをを。やちしみ給ひて。前ゐ姑く待て。見給ふれとて約尸給ふ。ゐれゐめけ尸。○此段の故事と。下ゐ大国主神れ。夜見国ゐ

往坐る段ふ見えさる。蛇室屋。吳公。蜂室屋ふどれおそ。ぱと須佐之男大神の御頭の虱ふ。吳公れあかにて有し事れどを合せて。おらくよ按ふよ。實ふも彼国も。伊邪那岐大神の。不須也凶目汚穢之国。と詔ふ体如く。甚も穢き国ふゆゆにも。其も彼国ふ入坐せまで。卓越て尊ち神さち少申せども。其汚穢よはみまて。かく体御有貌と爲り給ふと見えさゆ。抑彼国もしも。始ゆれ大虚空ふ生出る一物をも。輕く赤く清かる物の萌騰にて。天と成れ体後ふぱと彼一物の根底ふ生れる我以て考ふ体ふ。此国土の重く濁れる。其底ふ成まるふまで。ふを殊ふ重く濁りぱ

と穢き物の。凝集にてそ成ふれむ。故上件の如き事等の有れらむ。其も人躰を以て考るも。頭れ方も。等く清らるを。腰よゆ下も。卑く淨らら処も有るふど。自ら此理よりて此夜見国も。後ゆも大地と斷離れて。月叶ふ処ゆ。夜見と爲まる体を。猶彼国の成し邊ふ成れる国くは。大地れ下方ふる故ふ。自よ穢物れ流落ぢ。禍事惡事の行留体ふき謂れまバ。国柄れ卑ら体べき理の具れるをとく思ふ

ぢし。

於是伊邪那岐命見畏而。吾不

意到伊那志許米伎汚穢国矣
詔而逃還出時伊邪那美命恥
恨而白曰何不用要言而令恥
見吾耶汝已見我情我復見汝
情白出時伊邪那岐命亦慙焉
因將出返出時不直默歸而盟
出曰族離不負於族詔出而乃
唾出時成坐神出名速玉出男
神次掃出時成坐神出名豫母
都事解出男神亦名謂大事忍

男神。凡二神矣。今世人。夜忌燭一火者。此其縁也。

見畏而亡。師云見て畏むあり。古事記ふ所く此詞ありと。見驚見喜見感あど加志許年は。たそ彼〳〵古とあり。推古巻歌ふ。訶之胡彌氏とありぬ。字鏡ふ悸を惶也也注し。加志古年とも。於曾留とも有り。

○伊那志許米伎汚穢国。伊那ハ。辭否あぢ〳〵同言ふて。此は惡み厭ふ御言あり。書紀ふ不須也と。也字を添られさる信るその意ありぬ。姑く語を切て心得ぬし。○志許米伎はまた志許ハ。師説ふ志許賣の志許と

一ッ了て。醜あり。万葉ふ。鬼乃益ト雄。鬼乃志許草。志許霍公鳥。鬼之四忌手之許都於吉奈。あれらの鬼字を。於尓乃。と訓るも非あり。とも醜字の偏を畧るゥ。又醜女の意を得て鬼とハ書ゥ。いぶきよまれ。志許あり。然ど云へる。皆其物を惡み罵て。志許とは云あり。米伎は。炎ゥむ。米き。炎く。めゆく。むし米く。ぢ〳〵。炎く。おまゆ米く。おぢ。多く云。米久の活けるふて。此も。直ふ夜見の国のりちまを指て詔ふふれむ。用誤ふて。其貌を云。辭あり。書紀ふ。不須也凶目汚穢。此云伊儺之居梅枳枳多儺枳と。又天忍穂耳尊の天降まに処ゥ。不須也頗傾凶目杵之国とありぬ。○到矣は。彼国ふ行給ひし事を歎息て。かく詔ふる。亡。○逃還。逃てふ言も。雄略天皇巻の大御歌ふ。爾宜能煩理斯とあり。○何は那

敘母と訓ばし。痛く咎め給へる御言れゆ。○不用要言而は。知岐理斯言衣伎加受氐。と訓むべし。用字を常の訓れまゝよ。母知比と訓む。非ずして其要ぴはせる御言は。かの且與豫母都神相論莫視吾。と詔ふ所是なり。○令恥見吾耶ハ。恥を與るを恥見にを云は古語なり。ちて如此白し給ふは。彼汚穢き御有狀を。男神の見給ハむと。我恥給ひて。莫視給ひそ。と禁あ万へるを。用給はで御覽ゝ事を。甚く恨怒坐ば御言なり。前よ御產の処を。御覽ゝ時に。あゞ恨み坐るよ著明く見えて。趣なるを。此れ御言に。御怒の御心れ。御言の上いと畏れあむ。其に豫母都戸喫し給ひて。歸坐がと。紀御身なゞら。男神の入來坐るふ。さにぐふ歸坐むの御心

にのゆて。豫母都神と相論て。其道にのらば歸らむと。議し給ふ間を待にの牙給に。て。恥見せ給牙ぴしらば。其慇懃なる御心の餘ふ。かの牙ぴて御怒を發し給牙るなり。穴かしこ。○情に。麻宇良と訓ばし。旧くコヽロと訓るハ非なり。此に女神の御会處のことよて。言義ハ眞心なり。下第百六十三段。ふ。豐玉毘賣命雖恨伺情事。とにる情も同じ。此をも旧くコヽロと訓るハ非なる事。上ふ同じ。ちて此を。前よ那佐祁と訓ばをぞ。後の稱れる故に改ば。其に前ふ成文を撰ぶる時よ。既くコヽロと訓るゞ非なる事を悟りて。中世の戯籍どもふ会処をナサケドコロと云ることにるに。上古より彼処をに。其名を顯りて言げり。し趣ふ聞もまば。名避の義りて。実の名なバ言ざぴしふ。こそ斯て情字をナサケと訓むに。彼処に。情の本処なる故よ是より轉して。物に哀を知る心なも云なるむと思

ひて。ナサケと訓しるど。此ハその正き始の称を以て云ゑき所おれむおゆ。かくて眞心は語北本ある。情字を塡れバ。卽此を轉用して。会具をも然稱ずるハ。彼處ゑかゑ人の眞情ゑ。凝結ゑ依處の無れゑ外ゑ。伊藤長胤ゑ辨疑録ゑ。情者好惡之実。人心之無偽飾者也。古書中或替実字。説曾子曰。如得其情。哀矜而勿喜。大学曰。無情者不得盈其辞。左傳称晉文公曰。民之情偽盈。知之。故或曰。事情。或曰。情願。好色之心。人之所必有。而最無偽者。故曰。情欲情實。則相治。為好色之心。示其心之所好。而無偽者也。と云るゑとく叶へり。詩小序標有梅。男女及時。也の注ゑ陳氏曰。男女及時之説。聖人之慮。天下也。血気既壯。進盈。自撿。情實既開。奚顧。礼義云々ゑど見え。ゑ布情。字を。会処ゑ関係せる語いと多く。念々彼処ゑ疑思れる。ゑ。情痴と名け。彼処を人ゑ委去る。ゑ情人。或ゑ情郎と云。六朝遺事ゑ。煬帝戯月賓曰。儂之愛汝。只是情と云。るゑ。ゑは会処を直ゑ情と云へゆ。猶多ゑれど。然のみ挙むこと煩しきバ洩し故。但し此は。女会をゑみ云ゑ非ゑ。本をゑ男根を

も云ふ。ゑ思ゑ。麻宇良ハ男女ゑ通る稱ゑ。其ゑ次文ゑ。我復見汝情時伊弉諾冷示慙扨まゑと麻宇良を麻良とも云ゑ。馬と云るゑて著し。ゑは約言ゑ。宇を省くゑ常ゑり。印度籍ゑ。梵語ゑ。根ゑ母羅ゑ云ひ。まゑ摩羅とも云へゆ。さて彼大梵自在天王。ゑ。摩羅と云ひ。其后神を毘摩羅天と有て。夫婦共ゑ。麻羅と云を思ゑ。男女ゑ通る称ゑるゑゑ。いゑ。論ゑし。然ゑ女会ゑ。此方ゑて然云ゑ。ゑと。未その例を見ゑ。ゑて男易を摩羅と云ゑ。ゑは。ゑ靈異記ゑ。閑万良と見え。和名抄ゑ。房内經云。王莖男会名也。楊氏漢語抄云。厠示作髀破前一云麻羅。今案王篇等厠髀骨可為王莖義不見と有ゑ。此を今印本ゑ。厠破前一曰麻前良。ゑ有れど麻字の下ゑる前ゑ衍ゑゑ。ゑは破前の前字を誤めて。写し入ある物と見えゑゆ。ゑて破前ハ元ゑり假字ゑゑ。但しいけゑゑ意を用ひて書ゑる字ゑや有む。○或人云。ハゑと

云魚あり。形王莖に似あるけて此麻羅てふ語を。前に思ひ
ひ。それ故に名けさるべし。男莖を袁婆斯と訓み。和名
抄に破前。太秦牛祭文に。大閤ぶどゐる。是古名にて。麻羅
ちふ名も。中世の比丘等ぐ事好みに。梵語を以て稱せる
ぞの。世に弘はれる稱ならむ。ふに太秦牛祭文に。まと閤風とも見え。新猿楽記に。閤大而長八寸四伏云くれど有ゆ。れに麻羅ちふ名は。書等に數見えとり。其も古事記を始め。古
書ぐもに。天津麻羅。命。大麻羅。命。天都赤麻良。命。天照眞良
建雄。命。ど云名ゐの。姓氏録に。麻羅宿祢と云人も見ゆ。麻羅てふ語。もし
元と。会具を云名ならば。其を神名に負ぢくも非ぢ。神
名の麻羅も。眞浦とも。麻占とも書さる例有れど。此は万

葉歌に。且日照依嶋の御門に鬱悒ちく。人音も爲ねば眞
浦悲しも。と詠さる眞浦と同じ古言にて眞心の義なれ
ば。偖こそ天津赤占とも見えされ。浦占とも
に借字りて心の義なることと。言も更なり。会具を云ふ
麻良とも。元と。別なぢ。思ひ決めて在れるに。此頃大
自在天の神實は天根れると。彼御戈は古傳を思ひ合せ
て。神名は麻良。はと会具を麻羅と云も。元より古言にて
梵語に。自在天を麼羅と云も我ぐ古言の。彼國に傳れ
依りて。同語なる事を解て。得さり。そは我友荻野長は。佛
籍にあをき博覧に
きば。上に云る。会具を麻羅と云は。梵語にて。神名の麻良
とは別ならむ。と思ふる考を語しりぞ。長云く。印度にて。
華蔓を麼羅と云ふ。是語の本にて。自在天をもちゐ云む。
其飾れる華蔓の。美麗なるとり負る名と聞も。そは我ぐ

古ふ珠玉を身の飾とせる我思ふ天津麻羅命ぞと云ふ神名も由有て聞もれず会を麻羅と云も元とり此方の古言あるべし猶今一度とり並べ彼これ思ひ合せて考ふよと云ふ催されてせんり彼これ思ひ合せる

ふ神の名は麻良も眞心ふ依上て此處の情字は麻宇羅を訓まむふ論ひ無れず御典を記せる人く其意を以て此字をば書れんむ然きば男女は会處ふ通る名ふ依こと既ふ云ふる如く御紀文ふて著明ふ依ふ上ふ引く靈異記和名抄まと餘書等ふも玉莖はみの名として今も然稱ふきと此は後の事と爲ばし女会は名は鎮火祭詞ふ保止保神楽哥ふ会名久保桑家漢語抄ふ会門比奈登和名抄ふ房内經云玉門女陰名也通鳧楊氏漢語抄云吉舌比奈佐伎ふどふの男易を男柱ヲバせと云は男柱の轉語と聞也実ふ男の柱ふゆうし但し此名ハ彼瓊戈を国中は御柱

と爲給ふる謂ぞ名さりれむまと此ふ依て思へば神まと貴人を計へて幾柱と云ことも師説は有れど男莖を柱と云ふより出さる語ふるゆ扨まと往年駿府ふ物せる時ふ小原雄英老翁ゲ語ふ男会を閉能許と云は保古と同語ふらむ閉能の切ぞ保ふきむふ依ふ上ふ入きむとも所思ざぞしゆと今思へば少ゆ由ふ如説ふは非ず但し和名抄ふ陰核俗云篇乃古刑德敎云丈夫淫乱割其勢者則陰核也と有ハ字彙ふ宮刑男子割勢外腎也と云るふ拠きバ睪丸をいふ語ふるを今は並て玉莖を云ふ語とふれり名の趣を思へば玉莖の名は如て聞もるは今いふ所正しくて陰核の名とせるは和名抄の誤ふらむも知ぞゆらば衆經音義ふ勢峯謂陰莖也とふの是餘の西戎籍ふも此名あるゆ面白き名ふりかし

扨布麻羅と云語ふ就ては印度ふ謂もる大梵自在天王を云を始は男易女会は名ぞもれふと取總て印度藏志の大千世界品末節の處ふ諸經論を引て委く論ふを合せ見るばし○盟之曰言義

下ふ注なし。第三十二段。○族離。族を本書ふ宇我邏と訓注あり。親屬まと親族同族ふど有ふを皆ふ訓り言義いはど考ふ得ず。安康天皇巻ふ等族といふ言もあり。師も宇賀良ハ生族夜賀良は家族の意ふ。ふふとく考ふべし。とちて此は夫婦の御むおびを斷給むむと外云れと。其む上件の織く畏き有狀を御覽ちて。のば御後を追て來坐る御心む失給ひおれむふるばし。俗ふあいその故きさる。ふど云心ばふれり。○唾之時。和名抄ふ。唾和名豆波岐とあり。師云。唾は津吐の意ふるなしと有り。ふふ記傳十の五十葉ふ說あり。ちて唾し給ふふ。彼織き有狀を御覽ちて。其織物ふ得堪給むば て御所爲ふゆ。今も織物を見て堪ゑとく思ふ時む人も然ふるとちふり。○速王之

男神名義速ハ唾し給ふふ狀の速ふとと申せふふ。はと例のふふ稱とる言ふも有ばし。王む津吐の形む。王ふも似とまむかくは申ばふ。神名式ふ出雲國意宇郡ふ速王神社。紀伊國牟婁郡熊野早王神社。大。○早宇速ふ作る本もあり。此社む清和天皇紀貞觀元年正月廿七日從五位下熊野早王神從五位上同年五月從二位同五年三月二日正二位ふ見え長寛二年賴業勘文ふ天慶三年二月正一位とあり。夫木集ふ撿校法親王ふ熊野新宮と稱ばむ是ふ。ぎの葉ふみゆ々る露の むや玉ふ。むばぶの宮や光そふらむ。新宮とあり。さて新宮とハ此社ふ並びて熊野坐神社あるふ對へて云ふるべし。南紀名勝志ふ熊野村新宮庄ふ上熊野村中熊野村下熊野村あり。今新宮村と云も。元む熊野村の内ふれど

も。新宮大神鎮座以後所名とせるゞ。諸書ふ。熊野村と云る八。此処ふるぼし。凡て年貢一郡を。熊野と云る八。新宮熊野村ゟ因て云ふと見えさめ。まと有馬村ゝ木之本庄。木之本村の南二十町許ふ所ゝ。有馬と云処ゝ西辺ふ。産田神社あめて。伊弉冉尊を葬さる処ゝを言傳ふと云ゆ。おゝ此熊野村のことゝ。第七十九段。熊成峯の処ふ。委く云ふを合せ考ゞし。○掃之時。此ゝ何を以て。いゝふして掃給ゞ之と云こゝを。今知ぼきふ所ゝら祢ど。若ゝ御衣の袖ふて掃ひ給ゞる処ゝらむの。其ゝ今も心よゝらぬ物を掃ふとては。然為ることゝ所ゝる字思べし。

○豫母都事解之男神。大事忍男神。此二名。義師云。ま於事解之男ゝは。ま之の解字。昔ゝ佐加と訓ども。然訓ゞきさどゝふる。證も例もおけきむ。登祁おらむ。女神男神族離ゝ為ふ方ふ就て。負せ奉ゞし名処ゝる歟。下ふ女神の御言ふ。吾與汝已生国矣。まと伊邪那岐大御神。神功既畢。御德示大矣

ゝも。と有れむ。夫婦離給ふも。既ふ大ゝる事業の成竟し故処ゝれゝば。此神名ゝ其方ふ就て事解とも。大事とも稱しふらむ。然ゝば此二名いひもて行ゝむ。一意ふ當れゞ。忍男は例の稱ふゞと有ゞ。師の此説ゝ依て。処ゝ按ゝ。解と遂とゝ。本同言ふらむゝ。今世の言ゝ成坐る由ゝ。速須佐之男命の生坐る處ふ。云ふ言を合せ考ふぼし。○今世人夜忌燭一火者。此其縁也ハ。伊邪那岐命の。此時一火燭して見給ふ所ゝの。夜見ふて有しゝ。ゝ処ゝれゝると同きを忌て。世人の一火燭ちぬとゝ。ゝふとふゆ。然ゝゞ。古燭火は。二三もはゝといく於も燃ゝ物ふゆゝ。

師云、今世よも石見、細あどふてた神ゑ供る燈を一ッとも
ゑことを忌て必ス二口ふをもし、まと櫛を掇ることを吾
忌むあり、と彼、
国人云、已き、

於是伊邪那美命。即遣豫母都
志許賣。亦云豫母都日狹女。八人而。令追
矣。故伊邪那岐命。拔御佩出十
拳劒而。於後手揮作逃行。取黑

御鬘而。投棄出則。乃蒲萄子生
矣。豫母都志許賣。摭食出間。逃
行然。噉了而仍追則。亦刺其右
出御美豆良。引闕湯津枕櫛而
投棄出則。乃筍生矣。豫母都志

許女又拔食其筍。噉了而更追。
最後則。其妹伊邪那美命。身自
追來焉。是時伊邪那岐命。已到
坐豫母都平坂。隱坐其坂出桃
樹下而。其實三箇採而。待擊出

則。雷等悉逃返矣。爾伊邪那岐
命告桃曰。汝如助吾。所有宇都
志伎青人草出。落苦瀨而惱苦
出時。可助焉詔出而。賜大加牟
豆美命云名矣。此桃出避惡鬼

事本也。又夜忌擲櫛者。此其緣也。

豫母都志許賣八人は。御紀ふ醜女此云志許賣とゐ卍。今は此注と。古事記ふ從て記せ卍。八人て。本ふヤツヒトと訓さきど。此て也多理を訓ゑし。ちて師說ふ。私記ふ。或說黃泉之鬼也を云卍。但し鬼とて。儒佛の書ふとく鬼の意ふて非ず。ゑゑ尋常の人れ類ふらで。おそろしき物を。世ゑ鬼と云是ふり。書紀欽明卷ふ。魅鬼とゐるも其意ふゆ。和名抄ふて。この醜女を。鬼魅の部ふ載さり。ちて名義て。形のおそろしく。見惡き城云ふ。

下文ふ。伊那志許米云くを有ると同じ。猶彼處ふを言べし。をゐ卍。此八人れ志許賣て。上ふ。八色之雷神をゐる卽是ふり。上第十八段ふ言るを見べし。ちて此をはと豫母都日狹女とも云は。名義いはゞ思ひ得ゑ。試ふ云はゞ。和名抄ふ。敗婦。比佐岐女と。ふるを思ふ。日狹女て比佐岐女ふて。豫母都國の資炊き れ事ふどを掌る卑き物と聞えと卍。然らで醜女とハ。其容の醜きをいふ称。比佐女とて。其掌事ふりいふ称ふて。此を雷と云へるハ。伊邪那岐命を追奉れる嚴きをざをり云るふや有ゑき。○鋏胤云。世ふゑけ短き鬼れ如き物を。レカミと云て。此レコメの轉れるふて非ざるゝ。ちて又ヒサメと云ふ。付て思ふ。レカミは丈短き物と見ゆるを。世ふ扁みて潰れとる物を。ヒレヤゲと云ふ。此てヒサメ。由ある事ふて非ざるゝ。此て孰れも試ふ云ふ。猶とく考ふばし。○遣而ハ。師云都迦波志氏と訓ゑし。○御佩之十拳劔て。上ふ出と卍。○後手ハ。師云手を後ざ

はゐ廻して物にるゐゐ。うゐゐ物語ふ。ゐゐ牙手ふゐゐ
ゐ云〻と有ゐ。○揮乍師云。古言ふ振を布久ゑも云し例。
万葉ふ。草の山吹を山振とも書とゐ。風ゐ吹と云も。振と
通ふ。応神巻ふ。振風比礼と云あり。はと皇極紀ふ。揮劔ともゐゐ。乍ハ此
ゐ爲ゐ。ゐら彼をも爲るを云辭ゐゐ。且〻の約まゐとる
歟とゐゐ。さて此處ゐ豫母都醜女の追來るを防ぎまに
御所爲ゐゐ。ちきゑ相向て防ぐとゐゐ。得逃給ゐぬふ依
て。逃ゐゐら防ぎはゐ故ふ。後手ふ物し給ふゐゐ。師もゐゐ云れ
ゐ。○逃行。師云行字は伊傳坐と訓ばし。そは必出坐ゐら
祢ぎ行給ふと云ゐゑをも。然言ふゐ古言ゐゐ。○黒御髮。

師云。凡て加豆良ふ三の品ゐゐ。葛蔓も同じ。と鬘と髮をゐゐ。
まゐ葛ハ葛ゐゐら五味忍冬ゐゐど。凡て蔓草ゐゐとゐゐ。
鬘ハ頭の飾ふ懸る物ゐゐ。古書ふ纏とも。鬘とも書ゐ。纏
れども。鬘意ゐし。鬘ハ鬘の髮ハ和名抄ふ。和名加都良釋
かきざまゐゐ異ゐるゐゐ。ゐゐ字書ゐ見え安。縵ゐ見えと
名云。髮少者所以被助其髮也と有ゐて。俗ふ加毛自と云
物ゐゐ。如此ちまぐゐのまゑも本は一〻ゐ轉れる名ふ
て。草ゐ葛ふゐ出ゐゐちて其葛の本ゐ名ゐ都良ふて。古
事記中ふ。登許呂豆良都豆良書紀万葉ふ。磨左棄逗邏和
名抄ふ千歳藁百部ゐど云ひ。ゐれらの都良を。加豆良の
畧と思ふゐ。本末さゲ牙ゆ。
忍冬も字鏡ふは須比豆良と云ゐ。拾遺集雜下ふ。ちざ矣
ゐく。ゐるゐる瓜の根

ら見ても、と詠るも、蔓は頬を云ふけさるあり。今都留と云も、都良のうねをるあり。弓の弦をも、万葉は都良とも処り。馬具も漬鞦頭の都良も、草も蔓よゆゑ出々む漬も手綱もことあり。ちて何ふまれ蔓草を以て頭も飾ふかくるを髪葛と云ふ。是即鬘あり。ちて然鬘ふ用ふるから、立の子りて草も葛をも加豆良とは云ふらむはと髪も髪を飾具ふまで鬘とおふじ名を負せ故冠年さて鬘ハ上代ハ女男をもふ懸る物ふて蔓草を用ひしふとは。石屋戸の段ふ眞拆をうけしを始て。今云師も古事記ふ依て、眞拆を鬘ふせし由ふ言まされど此は誤ふて眞拆ハ手次ふることと其段の徴ふ論るゲし日影鬘ふどはと必しも蔓ふら祢ど花鬘菖蒲鬘柳鬘木綿鬘ふ乙ふ。されら母加豆良と云名も蔓草より出さるふり。まと絲ふどを

以ても作ひしふや。珠をうざ函ふと。天照大御神の御飾ふ見えさゆ。今云此ふと第三十四段ふ有ゆ。玉鬘を云は是ふり。髪ふも葛ふも玉うふらと云も此の玉鬘の名を移して呼ふのまさ只ふ外ふて云ふふもあるべし。安康巻ふ押木玉縵と云も有て。貴き寶ふ乙しふと見も。万葉ふ波禰縵を云ふを母ふの乙。縵字ハ此物ふても糸ふても造る故ふ設さる字ふや。ふう此方ふて作れる字多し。縵も本の字義ふれかはらで。右の意もて用ふ。ふるばし。○和名抄ふ花蔓を伽藍具ふ載されども。此茂もと天竺の人も頭の飾ふり。○今云万葉ふ波祢縵と有るも。凡て縵ハ垂るを物ふるを波祢上るべく造さるを云ふや。其も今世ふ童女の挂る波祢元結と云物も。元結とハ云へど。髪の飾ふ挂るもれて。実も縵ふるふ准ず。ちて此ふ黒と有るも。色もて云ふ依ふけれど。何物ふて。何如作ひしを知ゲふし。都豆良を黒葛とうけども。そも此

ふ由ふし。蒲子の成まるふ就て思ふば。此鬘のさは。蒲萄葛ふ似て。玉を垂さはゞ。彼實のふれる形ふや似さゐけむ。色は黒かゐけむも。彼實ふよしなるよや。と有ゆ。○棄ハ。師云。八千弟神の御歌ふ。脫棄を奴岐宇氐ゑみ給へゆ。紀ふ吹棄此云浮枳于都屢とゐり。此ふ依て宇氐と訓ばし。○葡萄子。師云。和名抄ふ。紫葛。和名衣比加豆良。葡萄。和名衣比加豆良乃美ゑなゐ。或說ふ。此物鬚あゐて。蝦ふ似さる蔓草ふる故ふ。然名くと云ゐ。○摭は。師云。字書ふ。拾也とも取也とも注せゐ。けて比呂比て。比理比と古言ふ云へゐ。万葉十五ふ。れにき扨白玉比利比てもゆ。れ。ふど。ふ有ゆ。○逃行然然。字ハ。師の行字を。伊傳坐袁。と

訓れふる袁ふなゐて〳〵弟ゞ加へさるふゐ。○湯津抓櫛。師云前ふて。男柱を取闕とゐるを。此てはふ〳〵引闕とゐれど。引と取とゐハ。たべて異ふる意ふし。凡の齒ハ中戔引闕ふ万ふれゆ。又前ふるは。左の御髻ふる御櫛。此ふるは右の外ゐ。○筍ハ。師云字鏡ふ。筍。太加年奈。和名抄ふも。筍亦作筍。和名太加無奈とゐのゆ。後の物ふ。多加宇奈と義云。凡て牟を宇と云ふ。ふ安例多し。音便ふり。名ハ意て。竹芽菜ふゐ。菜て食ふ添へて喰物の。凡ハ名外ゐ。かゞ〳〵きバ筍も。菜ふはるるときハ名をふるむふと云ひ。ふゞ〳〵て竹子と云故ふ。哥ふて竹子とハこよ。ふ。ゐ。此て拔食とゐれど。菜ふり。櫛の齒ハ狀。竹子の竝立るふ似とゆ。下ふ鹽土老翁ゞ。玄櫛を投しゝば。五百箇竹林ふれゐと有るも。此類ふゐ。○最後ハ。師云。神武卷

ふ。伊夜佐岐陀氏流とゐる。大御歌詞ふ依て。伊夜波氏と訓ゐし。（この御哥は前詞より知て立て於最前とゐゆ。○拾芥抄。人名字の中より最を弥の下ふ出せり。ふゐ伊夜と云言は彼大御哥の所ふ云べし。）大名年遲神段ふも。於最後來坐をゐ卍。（枕冊子よさいはて車と云るは最後之車ふり。其頃は最字を音ゐてぞ云々むまさ今言は最前と音ゐて云も。もと伊夜佐伎をふ言をりぞ出々む）波氏とは。何事よはれ。物の終を云こを。今も古も同じ。○身自ハ。師云美く豆加良を訓ばし。常ふは自一字をみ於のらと訓免ども。おの於ろら。（己自ふり。）を於のら。（手自ふり。）くち於かゐ。（口自ふり。）ふぎを云ゐば。自は加良ふて。みを於ろらは身於自れ卍。（今云此餘ゐ。囲がら。人がら。日自ふるばし。柄の意ふは非じ。）○桃樹木の名は物ふ見えとる始ふ卍。○

待擊之ハ。師說ふ來るものを待受て打ふゆ。景行卷ふ。倭建命は蒜の片端を以て。足柄ハ坂神を待打ゐ乃ふとゐ依ふ同じ。古言ゐは。待問。待取。待攻。待戰。待向。ふぎ云るふを多加卍。（此は早く來むことと欲るを。待と云とは異ふゆ。ゐゆ。來る者を。向ひ承ふを云ふり。後の物語ふどゐも。待云くと云語ふやし。○今云。伊勢山田辺より。礫を打ことを。白桃をくらはせる。と云とぞ。此ふ由ゐて卍げふ卍。）をゐの卍。○悉ハ。師云。許登碁登邇。と訓ばし。（火遠理命の大御哥。）まさ万葉五卷ふ見えゐゆ。○如助吾とは。師云。即今古の桃子を以て。迫追來し者共を。擊退けて。難をはげを給ふ故ふ詔ふ卍。○所有ハ。阿良由流と訓ばし。伊波由琉と同格の言ふて。共ふ古言ふ卍。（由は流ふ通ふ古言の格ふり。此阿良由琉。伊波由琉ふどを。さく漢籍読の

言とのみ思ふた誤あり。凡てからぶみよこと。古言の遺れること多きぞこのし。○宇都志伎青人草。御紀に顯見此云宇都志枳と有り。師云。私記に顯見者。見在之義也と有り。かくれざ宇都ハ現志伎た嬉悲の類れ志伎ふて。辭なり。神武紀に顯齋此云于図詩怡破毘。続紀十宣命に宇都志久母ふどあり。ちて人草れ事を如此詔ふた。書紀大穴牟遲命の御言に。吾所治顯露事者。皇孫當治吾將退治幽事。云く。かく幽冥事に對て顯露事と云ゑ如く。目に見えぬ顯ならぬ神に對て。顯なる世人を云ことぞ。應神卷に。神習。青人草習と云ことと有る。此も世人を。神に對て云るなり。雄畧天皇の葛木神の。形を顯して見え奉り給ふを。宇都志意美と詔へる。まと師說に。万葉に。空蟬。借字

に。宇都曾臣などなるもみな顯なき身と云なと有りを。なるはと現心夢現なぞの現み有同言なり。青人草を云所以た。次の文に。千人死。千五百人生と有る意ふて。草の彌益くに生茂たびなはに譬なる稱なり。青を云ふ心を著ぢし。私記に。貴人を木にと草に。賤民を草にとふと云說た非こをなり。故此稱は。神の。人の利益を爲給ふこを。人に損害を爲給ふこを。ふれみ。必用ふ稱なり。神の人を利益なと有ふた。千五百人生はく意なり。さて損害をなにハ。其に逆ひ敵むなり。故共に此稱を云れ。古書どもをくく見通して。眼を著ぢし。予ゞ云ことの虛らざること。自ちと有ふむ。○のら囮に。蒼生。黔首など云意をた。甚く異なり。也。此文字に迷て。意をと有誤ること。勿き書紀に。蒼生と作れるハ。さぐ有なと。ま似とる称の文字を。取きさるのみなり。○苦瀨ハ。師

云。久留志伎勢と訓むも。師の宇伎勢と訓まるぞよ。然ることおぼぼおぼ。
瀬を歌ふ。嬉勢。哀勢。戀勢。逢勢。如是有勢。おぞ賦こと外ぞ。
おの勢てふ言は。凡て縱ふも横よも用ふ。縱とは時おゆ。
長く經行時の間ふ。人ゑ逢時を指て。逢勢を云。此餘も同
じ。横とは處おゆ。川ゑ云を。上よぞ下
はて長き流れ間ふ。濟る處を指ゑ勢とは云ぞ。古哥ふ。渡瀬とゐる
是おり。けて川を。浅き処を云ぞて渡るものおれを。渡瀬
を。必浅き処おり。故それをり轉りて。必渡る処外ら祢ど。
浅き処なも瀬とハ云おぞ。まさるぎ故せ。早
瀬おども。本をぞさゆぜよゆぞ出つらむ。はと痛く後
れおきど。西行ゞ歌ふ。此處を勢ふせむと云るも。此
を其處とせむを云意おゆ。此の苦瀬を。苦患こをふ當れ

ゐを云て。縱横ふぞとされゆとゐぞ。○落を。師云。沈と同じ。
凡て凶ふゆくを。落とも沈をも云ひ。吉ふゆくを上るとも浮むとも云ぞ。○惱苦ハ。本ふ患惱とゐるを。火遠理命段ふ。惱苦をあゐゞよく通ゆきず替ゑ。師云。久留志牟と訓るし。天智紀の童謡ふ。愛倶流之衛云く。阿例播倶流之衛とを。惱を惱の俗字とゐぞ。字書ふ。惱恫。不得志也とも。不得意。皃とも。まさ悾惚。不得志也とも注し。まさ悾惚をも通むし書て。窮困也。迫促也。苦也を。義。まさ恫。痛也。呻吟也とも云ゆ。○可助。師云多須祁氏余と訓ぎし。上の如助
吾を。此ゑかけて見ぎし。今吾を助しゞ如くふ。可助と云
おをおぞとゐぞ。字は私ふ加へるおゆ。○大加牟豆美
は。師云。大神之實おぞと。谷川氏云へりさも有べし。但し。大神

とかける言ふ所にならば、神の実此、號て。奇功を美て。かふ大てふ言を添て称へしあり。

の神とは稱給ひしなり。○今云、豆美の義て、師の今一の考ふも有て山津見は津見と、同じ意ふ解れさまど、此豆美て之実の意ゑぞ有べき。○此桃之避惡鬼事、本也。師云。桃の後世まで。鬼魅を避るハ。此大詔ふをれり。漢籍ふしも、桃のさる功能ゐることと殺これうきふ記せるを見れど、御国れみふら爻外国の末までも、此大神の大詔の驗あり。ハ由ふと知られて、いと貴し。○今云、ふ本第十二段、鄭川菜の火を鎮むる功能ある、ふとを云る説と、注せる説と、もを合せ考べし。さて尾張国ふぞふて、雷の鳴るとき、童子どもれ、雷よ落て、桃木で多〳〵かうと云とぞ。此の故事ふ由あること、とふるばし。○又夜忌擲櫛者。此其縁也。擲櫛ハ。那宜具斯を訓ばし。即本書ふ然有り。櫛を擲ると訓む非ふり。其て本ハ。櫛を擲るとゐれきど。既ふ其事の稱ふ称きる語ふれど外り。

事本也ハ。聞えるるゞ如し。然れど其解て、記傳三十四巻、四十八丁ふ見由。

於是伊邪那岐命。以千引磐。引塞其坂路而。中置其石。各對立而。度事戸。出時。伊邪那美命白曰。愛出吾名妹命。汝如此言則。

吾汝国出人草。一日千頭將絞殺白給矣。爾伊邪那岐命詔曰。愛出我汝妹命。汝然爲出則。吾哉。一日當立千五百產屋。自此以還莫來詔而。卽投棄其御杖矣。是以一日必千人死。一日必千五百人生也。

千引磐ゝ。師云知毘伎伊波と訓ばし。知毘伎能とをまぬぞ。古言の格れる。此を書紀ふ。千人所引磐石ぞ書れるるは。稱ゝ意を顯せ。依れ卍。万葉四ふ。吾戀ハ千引の石を七ぢか卍。頸ふ繫む。も云く。和名抄よゝ。知比木乃以之と有り。私記も同じ。かく有れども。石ハ伊波と訓ぞよき。はゝと下ふ。五百引石ぞ云も見ゆ。○引塞ゝ。師云比伎佐閉と訓ばし。佐閉ハ令障ふ卍。ならせを切れバ閉ふり。

今合を阿閦と云を同じ格あり。下ふ。以五百引石取塞其室戸をも有り。引と取とも。さて同じ事なり。上より櫛の齒を引闕とも取闕とも云るが如し。如是爲て追來坐依女神を禦留免奉り給ふ外り。○各對立而ハ師云。阿比牟伎多〻志氐と訓ぜし。万葉八ふ。天漢相向立而。まさ河向立

あどの戸書紀ふ此を相向而立と書り。○度事戸ハ許登度袁和多須と訓ぜし。其は御紀ふ建絶妻之誓と書て。絶妻之誓。此云許等度とあり。私記ふ度者猶如言度也の戸。師云。今俗言ふ人ふ受持ふむべき事を言付るを申渡れと云ふ。をく似さり。さて許登度てふ古をは御紀ふ書れと依字ふて。大意を聞えあり。荒木田久老説て。万葉二卷ふ狂言等ふも。二所ふあり。十七卷ふ。多婆許登〻のもとも書

書り。七卷ふ事等有ふくふ。十九卷ふ神言等まさ公之事跡乎外どのるふ依て考るふ。此ふる事戸ハ御誓言れ切ふ依を云ふらむ。神代紀ふ大諄辭此云布斗能理斗とのる下の斗は事戸の戸ふ同じ。外ふ万葉集中ふ例多く。皆それ事を切ふいひきはむるふ添さる意ハ同じ。さて古の添いふ登の言ふ。やゝ後の哥ふも見るを。今の哥人ふ。さる言あり。とも知ら始ふ。凡て古ふ證さむもれとも思ハ爻心を用ひぬが故ふ。を云て。例を多く舉さ依字。其は此人の万葉解ふ就て見るべし。鍬胤云。右て引さる。万葉十九卷ふる。公之事跡乎。とのるふ。其全哥を見るふ。大伴家持卿の哥ふて。王桙之道尓出立往吾者公之事跡乎負而之將去。と有り。今其意を考ふ依て。年ま祢く馴親みふる人と。今立別れふむ事のいと哀く。悽はしれ思ふる付てふ。事戸ちふ言ふ。絶妻之誓ともありて。妹脊の中

さ牙ふ末永く絶離る程れ事ふまバ中くふ今餞別よ
りの於ける公とゆ其の離別の誓とる事跡をし於れま授
賜れ已負持て夫婦ふたあら祢ど馴親みおる睦びを断
て出立むるは却りて心安のら年を離別を悲しみ思ふ
餘已ふ此段の故事よ依てかく
は詠出られあるべし○如此言則とは石を引塞
て事戸を度し給を云○汝国とた此顯国をさ化ふ已抑
御親生成給牙ふ国ち戈しも かく他げふ詔ふ彼国此国の
隔已を思へば甚も悲哀妃御言ふざ已れる○千頭師云
千人と云ゑきを如此詔ふた絞よ於きと依御言ふ已同
事を次ては千人死と云るふ合せて思ふ已し書紀は産方なも
千五百頭と書れとるた何ぞや文よ
拘りて古語を思ふさぬ故のふ已どおり○絞ハ師云字
鏡ふ縊絞也經也久比留と伊已頸を去絶て殺化を云漢国

の代くれ死刑の中ふも絞と云
伊り周礼ふ磬と云も此あり さて今あ殺と伊らで
絞殺をあるはいを上代ふ人を殺去ふはもはら絞しふ
や有らむまと殺ふさまく伊る何も身よ傷をあ絞
のみ傷ゑ故神の殺し給ふ義其跡あらはふ見
え祢ぢのく云ふりや ○然爲之則師云絞殺をさ化上てた如此爲
を云ひ古くふはかく云は文をか牙あるれみふらゑ凡
て加久と志加を去た細く云バ差伊已加久た我て於妃と
依事まさちし當已あ依事を指て云志加は向ふ人まあ
向ふ物ふ於ま之る事まとその言事ふどを指て云此と
其との差れ如し文章よ上を承て云ふも此れぢ絶あり けれをまと如是を
然を通ハ去て云る古を也古事記中ふ有方葉四て吾背子が如是

恋れこそ。云くおどのゐぐひた。○産屋と。末ふ其事見也。
然と云ばきを如是と云ふり。師云。今多く産むとは詔ハで立産
彼處ふ注ばし。第百六十段。
屋としも詔ふるは。上代の言ふ。子を生ん。茂然云おらはし
れむ。榮花物語根合卷ふ。大將殿も。女御の御産屋四月九
ふ。今二月三月をにぎさせとアはぎおアぬるいみじう
くち殘しうたぐしおげく云く。おれも御産のおとを御
うぶやぎ云アと。○師云。上の將絞殺を。久毘理許呂佐那。お
おの當立を。多氐く那と訓ばし。其と崇神卷歌ふ。伊傳氐
由加那。出て行むおり。仲哀卷。忍熊王歌ふ。迦豆伎勢那和。潜せむ我おり。
はと伊邪阿波那和禮波。いざ逢むる我むおり。万葉一ふ。去來結手名。

いざ結てまと二ふ。君爾因奈名。君ふ因おむおゆ。はと玉藻苅手
名。苅てむ。おれら。牟と云ばき茂那と云。てむをておれむを刈と云へり。
古語の一ハ格おり。ちて如此交ふ詔ふと。多からむ
おぎを云ふて。必おも。千と千五百の數ふ限らむとふは
非ず。○莫來ハ。久那と訓ばく。那伎曾と訓むと非おり。其と此ふ因て
成坐る神の。久那斗神ぎ申ば御名を負坐る。本因の處お
れぞ。アと。○杖と。和名抄ふ。杖。和名都惠ぎ云アと。○千人は。
師云。知比登千五百人と。知伊富比登と訓ばし。凡て人の
數を比登理。布多理。美多理。與多理おぎ云。皆古言おれど。
仁德卷。哥ふ。比登理書紀同卷の哥ふ。赴駄利。又夜儴利お
どあと。但し三人四人おどれ例を以ていはぐ。一人二人

を也。比登多理布多く理を云ばきふ是のみ比登理布多理と云て比登理て多を省き布多理て多くを約免て多を省き云ふ。書紀神武巻ふ一人を毘儴利とゐるも登多を約免て儴と云るふ。さて右の駄儴ふぞの假字ふ依らば何も登多を濁るべきふ。とも思ハるきど記ふ比登理とゐれど此ふ准ずて皆常ふ云如く清むばきふ。比登て又さきふハ書紀ふ五婦人をイ。ト。リ。ふど訓る処ゐり。此ト。リ。を正訓とせず。適座の切ず。と言ふて一人ハ一座。二人て二座。三人は三座。四人て四座。ゐや座と云て神ふ幾座と云ふ由ありとも思ひしゐども此ト。リ。てふ訓て一人ふ效ひて後ふ設さる言ふ去そゐら免。多妃を云ふは。神武紀ふ歌ふ。愛瀰詩烏毘儴利。毛く那比苔。蝦夷字一人ふ。百之人ふ。を伊依如く若于比登とぞ云きむ。ちきず書紀ふ醜女八人。又垂仁紀ふ壹佰人ゐるどあるも訓も古言ふるべし。○死ハ師云。志邇と訓ばし。雄畧紀の歌ふ。伊能知志那麻斯と伊ず。ふ万葉ふも數ふらば多し。古言ふず。今云第九十八段ふ見え

さる。沼河比賣歌ふ。伊能知波那斯勢多麻比曽とある斯勢て令死ふて。ふまを死てふふとの。哥ふ見えさる始ゑ。志爾ハ過去ふず。須岐て志を切る。志奴留ハ過去ゐふめ。然るを志迹て死字ふ音と思ふは非ず。○生也師云世ふ日くふ死ゐる人をず也。生ゐ〳〵ゐ多かるは。今此御言ふ由きず。大祓詞ふ。国中爾成出武天之益人等と見えまと青人草と云も此意ふ依ふと。上ふ云へるゐ如し。凡て人の死るは。豫母都大神の御所爲ふて。此の千頭將絞殺。と詔ず依御言の驗ふ因ず。生出るは。伊邪那岐大神の御恩頼ぞかし。漢国ハ。此傳命ふど云免るて。聖人ふ託言ふ欺れ。をえふらで。天まさ空理を信ゑるひゐふとふめ。千五百人那母と訓む。那母ハ續紀ふ宣命ふぞふいと多妃辭て。後世の文

章ふ。那年と云是れゆ。那母の轉れるあり。

○鋏亂云。古け巻を板ゑ彫らせる作者を。甲斐国巨摩郡江原里人。内藤昌實。同郡古市場邑ゑ住る。矢崎隨美。同所ある。矢崎豊長ら外正。

国立公文書館
National Archives of Japan